

事をしも云ひ出でぬ世なれば、況して是れは、「いと能く云ひ成しつべき便なり」と思すに、いと名立たし
 う、ひたすら世にじく成りて後に、恨み残すは世の常の事なり。其れだに人の上にては、罪深うゆゆしき
 を、現實の我身ながら、然る疎ましき事を云ひ續けらるる宿世の憂き事、すべて冷然き入に、如何で心も
 掛け聞えじ」と思し返せど、「思ふも物を」なり。齋宮は、去年内裏に入り給ふべかりしを、さまざま障る
 事ありて、此秋入り給ふ。九月には、やがて野の宮に移ろひ給ふべければ、二度の御禊の準備、取り重ね
 て有るべきに、唯だ怪しうほけほけしうて、つくづくと臥し惱み給ふを、宮人いみじき大事にて、御祈禱
 など様様仕うまつる。おどろおどろしき様には有らず、そこはかと無く「不煩ひノ二字アリ」て、月日を
 過ぐし給ふ。大將殿も、常に訪らひ聞え給へど、勝る方の甚う煩ひ給へば、御心の暇無げなり。まだ然るべ
 き程にも有らず、皆人も弛み給へるに、俄かに御氣色ありて、惱み給へば、いとどしき御祈禱の數を盡して
 爲させ給へれど、例の執ねき御物の氣一つ更に動かず。やんごとなき験者ども「珍らかなり」と持て悩む。
 さすがにいみじう調せられて、心苦しげに泣き乞ひて、「少し緩べ給へや、大將に聞ゆべき事あり」と述給
 ふ。「然ればよ、有るやう有らん」とて、近き御几帳のもとに入れ奉りたり。無下に限りの標に物し給ふを、
 「聞え置かまほしき事もおはするにや」とて、大臣も宮も少し退き給へり。加持の僧ども聲静めて法華經を
 讀みたる、いみじう尊し。御几帳の帷引き上げて見奉り給へば、いとをかしげにて、御腹いみじう高う
 て臥し給へる様、他人だに見奉らんには心亂れぬべし。況して「惜しう悲し」と思す、道理なり。白き御



衣に色合いと華やかにて、御髪いと長う煩たきを、引き結びて打添へたるも、「斯うてこそらうたげに艶めきたる方添ひて、をかしかりけれ」と見ゆ。御手を捉へて、「あなみみじ、心憂き目を見せ給ふかな」とて、物も聞し「困え聞え」給はず泣き給へば、例はいと煩はしう恥かしげなる御眸を、いと他意に見上げて、打凝視り聞え給ふに、涙の溢るる様を見給ふは、如何が哀れの淺からん。餘り甚う泣き給へば、心苦しき親達の御事を思し、又斯く見給ふに付けて、「口惜しう覺え給ふにや」と思して、「何事もいと斯うな思し入れそ。然りとも怪しうはおはせじ。如何なりとも必ず仰せ有なれば、對面は有りなん。大臣、宮なども、深き契り有る中は、行き廻りても絶えざなれば、相見る程ありなんと思せ」と慰め給ふに、「いで、有らずや。身の上のいと苦しきを、暫し休め給へと聞えんとてなん。斯く参り來んとも更に思はぬを、物思ふ人の魂は、げに撞るるものになん有りける」と、なつかしげに云ひて、

歎き化び空に亂るる我魂を結び留め上下がひの袂

と述給ふ聲、氣はひ、其人にも有らず變り給へり。「いと怪し」と思し廻らすに、唯だ彼の御息所なりけり。あさましろ、「人のとかく云ふを、善からめ者どもの云ひ出づる事」と聞き憎く思して述給ひ消つを、目に見す見す、「世には斯かる事こそ有りけれ」と疎ましう成りぬ。「あな心憂」と思されて、「斯く述給へど、誰とこそ知らね、確かに述給へ」と述給へば、唯だ其れなる御有様は、「あさまし」とは世の常なり。人人近う参るも、片腹痛う思さる。少し御聲も靜まり給へれば、「隙おはするにや」とて、宮の御湯持て寄せ給

へるに、かき起され給ひて、程無く生れ給ひぬ。「嬉し」と思す事限り無きに、人に假り移し給へる御物の氣どもの、妬がり惑ふ氣はひ、いと物騒がしくて、後の事またいと心もとなし。云ふ限り無き顔ども立てさせ給ふ氣にや、平らかに事成り果てぬれば、山の座主、何くれ、やんごとなき僧ども、爲たり顔に汗おし拭ひつつ急ぎ退かでの。多くの人の心を盡しつる日頃の名残少し打休みて、「今は然りとも」と思す。御修法などは、またまた始め添へさせ給ひつつ、先づは興あり、珍らしき御かしづきに、皆人弛べり。院を初め奉りて、親王達、上達部、残る無き産養どもの、珍らかに嚴めしきを、夜毎に見噴駭る。男にてさへおはすれば、其程の作法、賑ははしくめでたし。彼の御息所は、斯かる御有様を聞き給ひても、尋常ならず。豫てはいと危く聞えしを、「平らかにも、はた」と打思しけり。怪しう、我にも有らぬ御心地を思し續くるに、御衣なども、唯だ芥子の香に沁み返りたり。怪しさに、御洗髪参り、御衣清更へなど爲給ひて、試み給へど、猶同じやうにのみ有れば、我身ながらだに疎ましう思さるるに、況して人の云ひ思はん事など、人に述給ふべき事ならねば、心一つに思し敷くに、いと御心變りも増さり行く。大將殿は心地少し寛舒めて、あさましろ程の間はず語りも、心憂く思し出でられつつ、いと程經にけるも心苦しう、また氣近う見奉らんには、如何にぞや憂たて覺ゆべきを、人の御爲め、いとはしう思して、御文ばかりぞ有りける。甚う煩ひ給ひし人の御名残ゆゆしう、心弛び無げに誰も思したれば、道理にて「不御アリ」遊行も無し。猶いと慥ましげにのみ爲給へば、例の様にてもまだ對面し給はず。若君のいとゆゆしきまで見え給ふ御有様を、

今からいと様殊に持て愛護き聞え給ふ様殊かならず、事合ひたる心地して、大臣も「嬉しう、いみじ」と思ひ聞え給へるに、唯だ此の御心地纏り果て給はぬを、心もとなく思せど、「然ばかりいみじかりし名残にこそは」と思ひて、如何でか然のみは御心をも惑はし給はん。若君の御眸の美くしさなどの、春宮にいみじう似奉り給へるを、見奉り給ひても、先づ戀しう思ひ出でられさせ給ふに、忍び難くて「参り給はん」とて、「内裏などにも餘り久しく参り侍らねば、惚せさに、今日なん初立ちし侍るを、少し氣近き程にて聞えさせばや。餘り覺束なき御心の隔てかな」と恨み聞え給へれば、「げに唯だ偏に艶にのみ有るべき」事かはとて、原本ニアレド、因ニハ無ク、誤寫ナルコト明カナレバ略ス」中にも有らぬを、甚う哀へ給へりと云ひながら、物越にてなど有るべきかは」とて臥し給へる所に、御座近う参りたれば、入りて物など聞え給ふ。御答時聞え給ふも、細いと弱げなり。然れど無下に亡き人と思ひ聞えし御有様を思し出づれば、夢の心地して、ゆゆしかりし程の事なども聞え給ふ序にも、彼の無下に氣息も絶えたるやうにおはせしが、引き返し、つぶつぶと迷給ひし事どもも、思し出づるに心憂ければ、「いさや、聞えまほしき事いと多かれど、まだいと倦意げに思しためればこそ」とて、「御湯参れ」などさへ扱ひ聞え給ふを、「何時習ひ給ひけん」と、人哀れがり聞ゆ。いとをかしげなる人の甚う弱り損はれて、有るか無きかの氣色にて臥し給へる様、いとらうたげに心苦しげなり。御髪みかみの亂れたる筋も無く、はらはらと掛かれる枕の程、有り難きまで見ゆれば、「年頃何事を飽かぬ事ありて思ひつらん」と、怪しきまで打凝視ら九給ふ。「院などに参りて、いと疾う退か

でなん、斯様にて覺束なからず見奉らば、いと嬉しかるべきを、宮のつとおはするに、心無くやと憤みて過ぐしつるも苦しきを、猶やうやう心強く思し成して、例の御座所にこそ。餘り若く持て成し給へば、傍は斯く物し給ふぞ」など聞え置き給ひて、いと清げに打裝束きて出で給ふを、常よりは目留めて、見出だして臥し給へり。秋の司召あるべき定めにて、大殿も参り給へば、君達も勞はり望み給ふ事ども有りて、殿の御邊り離れ給はねば、皆引き續き出で給ひぬ。殿の中人少なに驚やかなる程に、俄かに例の御腕をせき上げて、いと甚う惑ひ給ふ。内裏に御消息聞え給ふ程も無く、絶え入り給ひぬ。足を空にて誰も誰も退かで給ひぬれば、除日の夜なりけれど、斯く理無き御障りなれば、皆事破れたるやうなり。喧嘩り騒ぐ程に、夜半ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都も、え請じ敢へ給はず。「今は然りとも」と思ひ弛みたりつるに、あさましければ、殿の中の人、物にぞ當り惑ふ。所所の御訪らひの使など立ち込みたれど、え聞え付かず揺動り満ちて、いみじき御心惑ひども、いと怖ろしきまで見え給ふ。御物の氣の度度取り入れ奉りしを思ひて、御枕なども然ながら、二三日見奉り給へど、やうやう變り給ふ事どもの有れば、限りと思し果つる程に、誰も誰もいといみじ。大將殿は、悲しき事に添へて、世の中をいと憂きものに思し沁みぬれば、尋常ならぬ御邊りの御訪らひどもも、「心憂し」とのみぞ、なべて思さる。院に思し歎き、訪らひ聞えさせ給ふ様、却りて而立たしげなるを、嬉しき瀬も交りて、大臣は御涙の暇無し。人の申すに従ひて、嚴めしき事どもを、「生きや返り給ふ」と、様様に殘る事無く、且つ掛は九給ふ事どもの有るを、見る見るも盡きせ

ず思し惑へど、甲斐無くて日頃に成れば、「如何がはせん」とて、鳥邊野に奉て奉る程、いとみじげなる事ども多かり。此方彼方の御送りの人ども、寺の念佛の僧など、其處ら廣き野に所も無し。院をば更にも申さず、后の宮、春宮などの御使、然らぬ所所のも参り交ひて、飽かずいみじき御訪らひを聞え給ふ。大臣はえ立ちも上がり給はず。「斯かる端の末に、若く盛りの子に後れ奉りて、踰越ふ事」と耻ぢ泣き給ふを、許多の人悲しう見奉る。「不終夜いみじう喧騒りつるノ句アリ」儀式なれど、いともはかなき御屍ばかりを御名残にて、曉深く歸り給ひつ。常の事なれど、人一人か、數多しも見給はぬ事なればにや、類ひ無く思し焦れたり。八月廿餘日の有明なれば、空の氣色も哀れ少なからぬに、左大臣の闇に昏れ惑ひ給へる標を見給ふも、道理にいみじければ、空のみ眺められ給ひて、

昇りぬる煙は其れと分かねどもなべて雲居の哀れなるかな

殿におはし着きても、つゆ睡眠まれ給はず。年頃の御標を思し出でつつ、「何とて、終には自ら見直し給ひてんと長閑に思ひて、等閑のすさびに付けても、辛しと覺えられ奉りけん。世を経て疎く耻かしきものに思ひて、過ぎ果て給ひぬる」など、悔しき事多く思し續けらるれど、甲斐無し。鈍ばめる御衣奉れるも、夢の心地して、「我れ先立たましければ深くぞ染め給はまし」と思すやへ、

限り有れば薄墨衣淺けれど涙ぞ袖を潤と成しける

とて、令諭し給へる標、いとど驚めかしき増さりて、經忍びやかに讀み給ひつつ、「法界三昧、普賢大士」と

打述給へる、行ひ慣れたる法師よりは顯なり。若君を見奉り給ふにも、「何に忍ぶの」と、いとど露けけれど、「斯かる形見さへ無からましければ」と思し慰む。宮は沈み入りて、其儘に起き上がり給はず、危ふけに見え給ふを、また思し騒ぎて、御祈禱など爲させ給ふ。はかなう過ぎ行けば、御わざの準備など爲させ給ふも、思し掛けざりし事なれば、盡きせずいみじうなん。斜に不備なるをだに、人の親は如何が思ふめる。況して道理なり。また類ひおはせぬをだに蕭蕭しく思しつるに、袖の上の玉碎けたりけんよりも、あさましげなり。大將の君は、二條の院にだに假初にも渡り給はず、哀れに心深く思し歎きて、行ひを實直に爲給ひつつ明し暮し給ふ。所所には御文ばかりぞ奉り給ふ。彼の御息所は、齋宮の左衛門の司に入り給ひにければ、いとどいつくしき御消まはりに言託けて、聞えも通ひ給はず。「憂し」と思ひ沁みにし世を、なべて厭はしう成り給ひて、「斯かる難難に添はざらましければ、願はしき様にも成りなまし」と思すには、先づ對の姫君の、蕭蕭しくて物し給ふらん有様ぞ、ふと思し遣らるる。夜は御帳の内に一人臥し給ふに、宿直の人は、近う廻りて侍へど、傍ら寂しうて、「時しも有れ」と寤覺がちなるに、聲勝れたる限り選り侍はせ給ふ。念佛の曉方など切び難し。深き秋の哀れ増さり行く風の音、「身に沁みけるかな」と、慣はぬ御獨寢に明しかね給ひつる朝ぼらけの、霧渡れるに、菊の氣色ばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文附けて、差し置きて往にけり。「今めかしうも」とて見給へば、御息所の御手なり。「聞えぬ程は思し知るらんや。人の世を哀れと聞くも譯けきに後るる袖を思ひこそ遣れ

只今の空に思ひ給へ餘りてなん」と有り。「常よりも優にも書き給へるかな」と、さすがに置き難う見給ふものから、「冷然の御訪らひや」と心憂し。然りとて、かき絶え、音なう「困ひ」聞えざらんもいとほしく、人の御名の朽ちぬべき事を思し亂る。「過ぎにし人は、とても斯くても然るべきにこそ物し給ひけめ、何に然る事を、さださだと分明かに見聞きけん」と悔しきは、我心ながら、猶え思し直すまじきなめりかし。露宮の御清まはりも「煩はしくや」など、久しく思ひ煩ひ給へど、わざと有る御返り無くば「情無くや」とて、紫の鈍ばめる紙に、「此上無く程候侍りにけるを、思ひ給へ意らずながら、愼ましき程は更に思し知るらんやとてなん。

留まる身も消えしも同じ露の世に心置くらん程ぞはかなき

且つは思し消ちてよかし。御覽せすもやとて、是れにも」と聞え給へり。里におはする程なりければ、忍びて見給ひて、微めかし給へる氣色を、心の鬼に著く見給ひて、「然ればよ」と思すも、いとみじ。猶いと限り無き身の憂さなりけり。「斯様なる聞え有りて、院にも如何に思さん。故前坊の同じき御兄弟と云ふ中にも、いみじう思ひ交し聞えさせ給ひて、此の齋宮の御事をも、懇ろに聞え付けさせ給ひしかば、其御代りにも、やがて見奉り扱はんなど、常に宣はせて、やがて内裏住し給へと、度度聞えさせ給ひしをだに、いと有るまじき事と思ひ離れにしを、斯く心より外に若若しき物思ひをして、終に浮名をさへ流し果つべき事」と思し亂るるに、猶例の標にもおはせず。然るは大方の世に付けて、心にくく由ある聞え有りて、昔より名高

く物し給へば、野の宮の御移るひの程にも、をかしく今めきたる事多く爲なして、殿上人ども好ましきなどは、朝夕の露分け歩りくを其頃の役になんするなど、聞え「困き」給ひても、大將の君は、「道理ぞかし、故は飽くまで付き給へるものを。若し世の中に飽き果てて下り給ひなば、驚驚しくも有るべきかな」と、さすがに思されけり。御法事など過ぎぬれど、正日まで猶籠りおはす。慣はぬ御徒然を心苦しがり給ひて、三位の中將は常に参り給ひつつ、世の中の御物語など眞實やかなるをも、また例の亂りがはしき事をも聞え給ひつつ、慰め聞え給ふに、彼の内侍ぞ打笑ひ給ふ種はひには成るめる。大將の君は、「あない」とほしや。祖母殿の上な甚ら輕め給ひそ」と諫め給ふものから、常に「可笑し」と思したり。彼の十六夜の明亮ならざりし秋の事など、然らぬも標標の好色事どもを、互に隈無く云々顯はし給ふ。果て果ては哀れなる世を云ひ云ひて、打泣きなども爲給ひけり。時雨打爲て、物哀れなる暮つ方、中將の君、鈍色の直衣、指貫、薄らかに衣更して、いと雄雄しく鮮明に、心耻かしき様して参り給へり。君は西の妻戸の勾欄に押し掛かりて、霜枯の前栽見給ふ程なりけり。風荒らかに吹き、時雨さと爲たる程、涙も争ふ心地して、「雨と成り雲とや成りにけん、今は知らず」と打獨言ちて、頬杖つき給へる御標、「女にては見捨てて置くならん魂、必ず留まりなんかし」と色めかしき心地に打憂視られつつ、近う蹲居給へれば、しどけなう打亂れ給へる様ながら、紐ばかりを差し直し給ふ。是れは今少し濃かなる夏の御直衣に、紅の艶やかなる引き重ねて、覆れ給へるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。中將も、いと哀れなる眸に眺め給へり。

雨と成り時雨るる空の浮雲を何れの方と分きて眺めん
「行方無しや」と、獨言のやうなるを、

見し人の雨と成りにし雲井さへいとど時雨にかき昏らす頃
と述給ふ御氣色も、淺からぬ程著く見ゆれば、怪しう、年頃はいとしも有らぬ御志を、院など居立ちて宣はせ、大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方さまに、持て離るまじきなど、方方に差し合ひたれば、えしも振り捨て給はで、物憂げなる御氣色ながら、有り經給ふなめりかしと、いとほしう見ゆる折折ありつるを、「眞にやんごとなく重き方は、殊に思ひ聞え給ひけるなめり」と見知るに、いよいよ口惜しう覺ゆ。萬づに付けて、光失せぬる心地して、屈し甚かりけり。枯れたる下草の中に、體膚、羅縵などの咲き出でたるを折らせ給ひて、中將の立ち給ひぬる後に、若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れの籬に残るまでしこを別れし秋の形見とぞ見る

「匂ひ劣りてや御覽せらるらん」と聞え給へり。げに何心無き御笑顔ぞ、いみじう美しくしき。宮は吹く風に付けてだに、木の葉より顯に脆き御涙は、況して取り敢へ給はず。

今も見てなかなか袖を朽たすかな垣は荒れにし大和なでしこ

猶いみじう徒然なれば、朝顔の宮に、「今日の哀れは然りとも見知り給ふらん」と、推し量らるる御心はへなれば、暗き程なれど聞え給ふ。綱間違けれど、然の物と成りにたる御文なれば、咎無くて御覽せさす。空

の色したる唐の紙に、

分きて此の暮こそ袖は露けけれ物思ふ秋はあまた經ぬれど

「何時も時雨は」と有り。御手などの心留めて書き給へる、常よりも見所ありて、「過ぐし難き程なり」と人も聞え、自らも思されければ、大内山を思ひ遣り聞えながら、「えやは」とて、

秋霧に立ち後れぬと聞きしより時雨るる空も如何がとぞ思ふ

とのみ、微かなる墨附にて、思ひ成し心憎し。「何事に付けても、見勝りは難き世なめるを、辛き人しもぞ、哀れに覺え給ふ人の御心さまなる。冷然ながら、然るべき折折の哀れを過ぐし給はぬ、是れこそ互に情も見果つべきわざなれ。猶故づき由過ぎて、人目に見ゆばかりなるは、餘りの難も出で來けり。對の姫君を、然は生ふし立てじ」と思す。「徒然にて戀しと思ふらんかし」と、忘るる折無けれど、唯だ女親無き子を置きたらん心地して、見ぬ程關心たく、「如何が思ふらん」と覺えぬぞ心安きわざなりける。暮れ果てぬれば、大殿油近く參らせ給ひて、然るべき限りの人人、御前にて物語など爲させ給ふ。中納言の君と云ふは、年頃忍び思ししかど、此の御思ひの程は、なかなか然様なる筋にも掛け給はず。「哀れなる御心かな」と見奉るに、大方にはなつかしう打語らひ給ひて、「斯う此日頃、有りしより顯に、誰も誰も紛るる方無く、見慣れ見慣れて、えしも常に斯からずば戀しからじや。いみじき事をば然るものにて、唯だ打思ひ廻らすこそ堪へ難き事多かりけれ」と述給へば、いとど皆泣きて、「云ふ甲斐無き御事は、唯だかき昏す心地し侍るをば然るもの

にて、名残無き様に、あくがれ果てさせ給はん程、思ひ給ふるこそ」と聞えも遣らず、「哀れ」と見渡し給ひて、「名残無くば如何にか、いと心淺くも取り成し給ふかな。心長き人だに有らば、見果て給ひなんものを、命こそはかなけれ」とて、火を打眺め給へる眸の、打濡れ給へる程ぞめでたき。取り分きてらうたく爲給ひし小さき童の、親どもも無く、いと心細げに思へる、道理に見給うて、「あてきは、今は我をこそ思ふべき人なめれ」と述給へば、いみじう泣く。程無き袖、人よりは黒う染めて、黒き汗疹、黄草色の袴など着たるもをかしき姿なり。「昔を忘れざらん人は、徒然を忍びても、幼き人を見捨てず物し給へ。見し世の名残無く、人人さへ離れなば、たづき無さも増さりのべくなん」など、皆心長かるべき事どもなど述給へど、「いでや、いとど待ち遠にぞ成り給はん」と思ふに、いと心細し。大殿は、人人に、實際を置きつつ、はかなき御弄物ども、また眞に彼の御形見に成るべき物など、わざとならぬ様に取り成しつつ、皆配らせ給ひけり。君は、斯くてのみも如何ではつくづくと過ぐし給はんとて、院へ参り給ふ。御車差し出でて、御前など参り集まる程、折り知り難なる時雨打注ぎて、木の葉誘ふ風、慄ただしう吹き拂ひたるに、御前に侍ふ人、物いと心細くて、少し隙ありつる袖ども濡り渡りぬ。夜さは、「やがて二條院に泊り給ふべし」とて侍の人人も、彼處にて待ち聞えんとなるべし。各立ち出づるに、今日にしも閉ぢむまじき事なれど又無く物悲し。左大臣も宮も、今日の氣色に、また悲しさを新めて思さる。宮の御前に、御消息聞え給へり。「院に覺東ながり宣はするに由り、今日なん参り侍る。假初に立ち出で侍るに付けても、今日まで長らへ侍

りにけるよと、亂り心地のみ動きてなん、聞えさせんもなかなかに侍るべければ、其方にも参り侍らぬ」と有れば、いとどしう宮は目も見え給はず沈み入りて、御返も聞え給はず。左大臣ぞやがて渡り給へる。いと堪へ難げに思ひ、御袖も引き放ち給はず。見奉る人人もいと悲し。大將の君は、世を思ひ續くる事いと様にて、泣き給ふ様、哀れに心深きものから、いと様よく愛め給へり。左大臣久しう休息ひ給ひて、「船の積りには、然しも有るまじき事に付けてだに、涙脆なるわざに侍るを、況して干る世無く思ひ給へ惑はれ侍る。心をえ寛舒め侍らねば、人目もいと亂りがはしく、心弱き様に侍るべければ、院などにも参り侍らぬなり。事の序には、然様に面向け奏せさせ給へ。幾許も侍るまじき老の末に、打捨てられたるが辛うも侍るかな」と、せめて思ひ静めて述給ふ氣色、いと理無し。君も度度鼻打かみて、「後れ先立つ程の定め無きは、世の性と見給へ知りながら、差し當りて覺え侍る心惑ひは、類ひ有るまじきわざになん。院にも有様奏し侍らんに、推し量らせ給ひてん」と聞え給ふ。「然らば時雨も隙無う侍るめるを、暮れ程に」とと懇話かし聞え給ふ。打見廻し給ふに、御几帳の後ろ、障子の彼方などの明き通りたるなどに、女房三十人ばかり押し張りて、濃き薄き鈍色どもを着つつ、皆いみじう心細げにて、打委垂れつつ居集まりたるを、「いと哀れ」と見給ふ。「思し捨つまじき人留まりた〔不給へ〕れば、然りともの物の序には立ち寄らせ給はじやなど慰め侍るを、偏に思ひ遣り無き女房などは、今日を限りに思し捨て〔不無シ〕つる故郷と思ひ届して、長く別れぬる悲みよりも、唯だ時時馴れ仕うまつる年月の名残無かるべきを歎き侍るめるなん道理な

る。打解けおはします事は侍らざりつれど、然りと終にはと、空想のみ爲侍りつるを、げにこそ心細き夕に侍れ」とても、泣き給ひぬ。「いとあさはかなる人人の歡きにも侍るかな。眞に如何なり」とも、長閑に思ひ給へつる程は、自ら御目離るる折も侍りつらんを、なかなか今は何を頼みにてかは意り侍らん。今御覽じてん」とて出で給ふ。左大臣見送りて入り給へるに、御装飾より初め、有りしに變る事も無けれど、空想の空しき心地ぞ爲給ふ。御几帳の前に御硯などを打散して、手習ひ捨て給へるを取りて、目を押しほりつつ見給ふを、若き人人は、悲しき中にも微笑むも有るべし、哀れなる古言ども、唐のも日本のも書き注しつ、草にも眞にも、櫻標珍らしき様に書き交せ給へり。「賢の御手や」と、空を仰ぎて眺め給ふ。外人に見奉らんが惜しきなるべし。「古き枕、古き衾、誰と共にか」と有る所に、亡き魂ぞいと悲しき寢し床のあくがれ難き心憤ひに

また「霜の花白し」と有る所に、

君無くて塵積りぬる常夏の露打拂ひ幾夜寝ぬらん
一日の花なるべし、枯れて交れり。宮に御覽せさせ給ひて、「云ふ甲斐無き事をば然るものにて、斯かる悲しき類ひ、世に無くやはと思ひ成しつ、契り長からで、斯く心を惑はすべくこそは有りけめと、却りて辛く、前の世を思ひ遣りつな冷し侍るを、唯だ日頃添へて、戀しさの堪へ難きと、此大將の君の、今はと餘所に成り給はんなん、飽かずいみじく思ひ給へらるる。一日二日も見え給はず、離れ離れにおはせ

しをだに、飽かず胸痛く思ひ侍りしを、朝夕の光失ひては、如何でか長らふべからん」と、御覽もえ忍び取へ給はず泣い給ふに、御前なる大人大人しき人など、いと悲しくて、「さ」と打泣きたる、漫ろ寒き夕の氣色なり。若き人人は、所所に群れ居つ、己がどち哀れなる事ども多かり。院へ参り給へれば、「いと、若君を見奉りてこそは慰むべかめれと思ふも、いとほかなき程の御形見にこそ」とて、各假初に退かでて参らんと云ふも有れば、互に別れ惜む程、各自哀れなる事ども多かり。院へ参り給へれば、「いと甚う面瘦せにけり。精進にて日を経る氣にや」と、心苦しげに思召して、御前にて物など参らせ給ひて、とや斯くやと思し扱ひ聞えさせ給へる様、哀れに忝し。中宮の御方に参り給へれば、人人珍らしがり見奉る。命婦の君して、思ひ盡させの事どもを、「程經るに付けても、如何に」と御消息聞え給へり。「常無き世は、大方にも思ふ給へ知りしを、目に近く見侍りつるに、厭はしき事多く、思ひ給へ亂れしも、度度の御消息に慰め侍りてなん、今日までも」とて、然らぬ折だに有る御氣色、取り添へていと心苦しげなり。無紋の上の御衣に、鈍色の御下裳、櫻卷き給へる重れ姿、華やかなる御装ひよりも、艶めかしき増さり給へり。春宮にも、「久しく参らぬ覺東なき」と聞き給ひて、夜更けてぞ退かで給ふ。二條院には、かたがた掃ひ磨きて、男女侍ち聞えたり。上臈ども皆参り上りて、我も我もと装束き化粧したるを見るに付けても、彼の居並み屈したりつる氣色どもぞ、哀れに思ひ出でられ給ふ。御装束奉り更へて、西の對に渡り給へり。更衣の御装飾、疊り無く鮮明に見えて、好き若人、童部の形姿、目安く調へて、「少納言がもてなし、

心もとなき所無う、心にくし」と見給ふ。姫君、いと美しく引き装ひておはす。「久しかりつる程に、いと此上無うこそ大人び給ひにけれ」とて、小き御几帳引き上げて見奉り給へば、打側みて恥らひ給へる御様、飽かぬ所無し。火影の御傍目、頭附など、唯だ「彼の心盡し聞ゆる人の御様に違ふ所無くも成り行くかな」と見給ふに、いと嬉し。近く寄り給ひて、覺束なかりつる程の事どもなど聞え給ひて、「日頃の物語、長閑やかに聞えまほしけれど、忌忌しう覺え侍れば、暫しは他方に休らひて参り來ん。今は隔絶無く見奉るべければ、厭はしうさへや思されん」と、語らひ聞え給ふを、少納言は「嬉し」と聞くものから、猶危く思ひ聞ゆ。やんごとなき御忍所多く、隠らひ給へれば、「また煩はしきや立ち代り給はん」と思ふぞ憎き心なるや。我が御方に渡り給ひて、中將の君と云ふに、御足など参りすさびて、大殿籠りぬ。朝には、若君の御許に御文奉り給ふ。哀れなる御返しを見給ふにも、盡させぬ事どものみなん。いと徒然に眺めがちなれど、何と無き御遊行も物憂く思し成りて、思しも立たれず。姫君の何事も有らまほしう調ひ果てて、いとめでたうのみ見え給ふを、似げ無からぬ程に、はた爲なし給へれば、氣色ばみたる事など、折折聞え試み給へど、見も知り給はぬ氣色なり。徒然なるままに、唯だ此方にて碁打ち、扇附など爲給ひつつ、日を暮し給ふに、心ばへのらうらうしく愛敬つき、はかなき御事の中にも、美しくし筋を爲出で給へば、思し放ちたる年月こそ、唯だ然る方からうたさのみ有りつれ。忍び難く成りて、心苦しければ「困ど」、如何が有りけん、人の差別見奉り分くべき御中にも有らぬに、男君は疾く起き給ひて、女君は更に起き給はぬ朝

あり。人人、「如何なれば斯くおはしますならん、御心地の例ならず思さるるにや」と見奉り歎くに、君は渡り給ふとて、御硯の箱を御帳の内に差し入れておはしにけり。人間に辛うじて頭擧げ給へるに、引き結びたる文、御枕の下に有り。何心も無く引き開けて見給へば、

あやなくも隔てけるかな夜を重ねますかに慣れし夜「困中」の衣を

と書きすさび給へるやうなり。斯かる御心おはすらんとは、かけても思し寄らざりしかば、「何とて斯う心憂かりける御心を、裏無く頼もしきものに思ひ聞えけん」と、あさましう思さる。晝つ方渡り給ひて、「惱ましげに爲給ふらんは、如何なる御心地ぞ。今日は若も打たで齋齋しや」とて覗き給へば、いよいよ御衣引き被せて臥し給へり。人人は退きて侍へば、寄り給ひて、「何と斯く慥せき御もてなほぞ。思ひの外に心憂くこそおはしけれな。人も如何に怪しと思ふらん」とて、御衾を引き遣り給へれば、「困汗にアリ」押浸して、額髪も甚う濡れ給へり。「あな憂たて、是れはいとゆゆしきわざよ」とて、萬づに慰籍へ聞え給へど、眞に「いと辛し」と思ひ給ひて、つゆの御答も爲給はず。「好し好し、更に見え奉らじ。いと耻かし」など怨じ給うて、御帳開けて見給へど、物も無ければ、「若の御有様や」と、らうたく見奉り給ひて、日一日入り居て慰め聞え給へど、解け難き御氣色いとどらうたげなり。其夜さり、亥子の餅参らせたり。斯かる御思ひの程なれば、事事しき様には有らで、此方ばかりに、をかしげなる檜破籠などはかりを、いろいろにて参れるを見給ひて、君、南の方に出で給ひて、惟光を召して、「此餅、斯う數數に所狭き様には有らで、明日

の暮に参らせよ。今日は忌忌しき日なりけり」と、打微笑みて述給ふ御氣色を、心敏き者にて、ふと思ひ寄りぬ。惟光確かにも承らで、「げに愛敬の始めは、日擧して聞し召すべき事にこそ。然ても子の子は幾つか仕うまつらす可う侍らん」と、眞實だちて申せば、「三つが一つにても有らんかし」と述給ふに、心得果てて立ちぬ。「物馴れの様や」と君は思す。「人にも云はで手づから」と云ふばかり、里にてぞ作り居たりける。君は慰籍へ佗び給ひ、今初めて盗み持て来たらん人の心地するも、いとをかしくて、「年頃哀れと思ひ聞えつるは、片端にも有らざりけり。人の心こそ憂なて有るものは有れ。今は一夜をも隔てん事の理無かるべき事」と思さる。述給ひし餅、忍びて甚う夜更して持て参れり。「少納言は大人しうて、耻かしようと思さん」と、思ひ遣り深く心しらひて、女の癖と云ふを呼び出でて、「是れ忍びて参らせ給へ」とて、香匣の箱を一つ差し入れたたり。「確かに御枕上に参らすべき祝ひの物にて侍る。あなかしこ、浮華に」と云へば、「奇し」と思へど、「浮華なる事はまだ習はぬものを」とて取れば、「眞に今は然る文字忌ませ給へ。餘も交り侍らじ」と云ふ。若き人にて、氣色もえ深く思ひ寄らねば、持て参りて、御枕上の御几帳より差し入れたるを、君ぞ例の聞え知らせ給ふらんかし。人はえ知らぬに、早且此箱を退かださせ給へるにぞ、親しき限りの人々、思ひ合する事ども有りける。御皿どもなど、何時の間にか爲出でけん。華足いと清らにして、餅の様も殊更び、いとをかしよう調へたり。少納言は、いと斯うしもやはとこそ思ひ聞えさせつれ。哀れに忝く、思し至らぬ事無き御心ばへを、先づ打泣かれぬ。「然ても内内に述給はせよかした。彼の人も如何

に思ひつらん」と私語き合へり。斯くて後は、内にも院にも、假初に参り給へる程だに、靜心無く而影に戀しければ、「奇しの心や」と我ながら思さる。通ひ給ひし所所よりは、怨めしげに露かし聞え給ひなど爲れば、「いとほし」と思すも有れど、新御枕の心苦しめて、「夜をや隔てん」と思し煩はるれば、いと物憂くて、惱ましげにのみもてなし給ひて、「世の中のいと憂く覺ゆる程過くしてなん人も見え奉るべき」とのみ、答へ給ひつつ過ぐし給ふ。今後は御櫛原殿、「因のアリ」猶此大將にのみ心附け給へるを、「げにはた、斯くやんごとなかりつる方も失せ給ひぬめるを、然ても有らん、何とか口惜からん」など、大臣御給ふに、「いと憎し」と思ひ聞え給ひて、「宮仕もをさをさしくだに爲なし給へらば、何とか悪しからん」と、参らせ奉らん事を思し勵む。君も尋常の儀には思さざりしを、「口惜し」と思せど、只今は他様に分くる御心も無くて、「何かは斯ばかり短かかめる世に、斯くて思ひ定まりなん。人の恨みも負ふまじかりけり」と、いとと危く思ほし懸にたり。「彼の御息所はいとほしけれど、眞の寄る邊と頼み聞えなんには、必ず心置かれぬべし。年頃の様にて見過ぐし給はば、然るべき折節に、物聞え合する人にては有らん」など、さすがに殊の外には思し放たず。「此姫君を、今まで世の人も、其人と知り聞えぬも、物氣無き様なり。父宮に知らせ聞えてん」と思し成りて、御裳着の事、人に遍くは述給はねど、尋常ならぬ様に思し設くる御用意など、いと有り難けれど、女君は此上無う疎み聞え給ひて、「年頃萬づに頼み聞えて、纏はし聞えけるこそ、あさましき心なりけれ」と悔しうのみ思して、さやかにも見合せ奉り給はず。聞えぬれ給ふもいと苦

しう、理無きものに思し結ほはれて、有りしにも有らず成り給へる御有様、をかしろもいとほしうも思され、一年頃思ひ聞えし本意無く、馴れは「不増アリ」さらぬ御氣色の、心憂き事」と恨み聞え給ふ程に年も復りぬ。朔日の日は、例の院に参り給ひてぞ、内裏、春宮などにも参り給ふ。其れより大殿に退かて給へり。大臣、新しき年とも云はず、昔の御事ども聞え出で給うて、「蕭蕭しく悲し」と思すに、いと斯くさへ渡り給へるに付けて、念じ返し給へど、堪へ難う思したり。御年の加はる氣にや、物物しき氣さへ添ひ給ひて、有りしより馴に、清らに見え給ふ。立ち出でて御方に入り給へれば、人人も珍らしう見奉りて忍び取へず。若君見奉り給へば、此上無う成長けて、笑ひがちにおはするも哀れなり。昨、口附、唯だ春宮の同じ様なれば、「人もこそ見奉り答むれ」と見給ふ。御裝飾なども異らず。衣桁の御装束など、例の様に爲掛けられたるに、女のが並ばぬこそ、なべて蕭蕭しく映無けれ。宮の御消息にて、「今日はいみじく思ひ給へぶるを、斯く渡らせ給へるになん、なかなか」など聞え給うて、「昔に慣らひ侍りにける御班も、月頃はいと涙に霧り塞がりて、色合無く御覽せられ侍るらんと思ひ給ふれど、今日ばかりは、猶更れさせ給へ」とて、いみじく盡し給へる物ども、また重ねて奉れ給へり。「必ず今日奉るべき」と思しける御下、嬰は色も織様も世の常ならず心殊なるを、「甲斐無くやは」とて齋更へ給ふ。「來ざらましかば口惜しう思されまし」と心苦し。御返りには、「春や來ぬるとも先づ御覽せられになん参り侍りつれど、思う給へ出でらる事ども多くて、聞えさせ侍らず。

あまた年今日あらためし色衣きては涙ぞふる心地する

えこそ思ひ給へ静めね」と聞え給へり。御返り、

新しき年とも云はずふるものは古りぬる人の涙なりけり

疎かなるべき事にぞ有らぬや。

神

齋宮の御下り近う成り行くまに、御息所物心細く思はず。やんごとなく煩はしきものに覺え給へりし大殿の君も亡せ給ひて後、「然りと」と世の人も聞え扱ひ、宮の中にも心ときめきせしを、其後しもかき絶え、あさましき御もてなしを見給ふに、「眞に憂しと思す事こそ有りけめ」と知り果て給ひぬれば、萬づの哀れを思し捨て、直道に出で立ち給ふ。親添ひて下り給ふ例も、殊に無けれど、いと見放ち難き御有様なるに言託けて、「憂き世を行き離れなん」と思すに、大將の君、さすがに今はと掛け離れ給ひなんも口惜しう思されて、御消息ばかり、哀れなる様にて度々通ふ。對面し給はん事をば、「今更に有るまじき事」と、女君も思す。「人は心づき無し」と思ひ置き給ふ事も有りげに、我は今少し思ひ亂るる事の増さるべきを、「あいなし」と心強く思すなるべし。齋の殿には假初に渡り給ふ折折あれど、甚う忍び給へば、大將殿はえ知り

給はず。容易く御心に任せて、参うで給ふべき御住處にはた有らねば、覺束なくて月日も隔たりぬるに、院の上、おどろおどろしき御憫みには有らで、例ならず時時憫ませ給へば、いとど御心の暇無ければ「因と」辛きものに思ひ果て給ひなんもいとほしく、「人聞き情無くや」と思し起して、野の宮に参うで給ふ。九月七日ばかりなれば、無下に今日明日と思すに、女方も心憫ただしけれど、「立ちながら」と度度御消息ありければ、「いでや」とは思し煩ひながら、いと餘り埋れ甚きを、「物越ばかりの對面は」と人知れず待ち聞え給ひけり。遙けき野邊を分け入り給ふより、いと物哀れなり。秋の花皆萎へつつ、淺茅が原も枯れ枯れなる邊の音に、松風強く吹き合せて、其事とも聞き分かれぬ程に、物の音ども絶え絶え聞えたる、いと聲なり。睜まじき御前十餘人ばかり、御隨身事しき姿ならで、甚う忍び給へれど、殊に引き装ひ給へる御装いとめでたく見え給へば、御供なる好色者ども、所からさへ身に沁みて思へり。御心にも、「何どて今まで立ち馴さざりつらん」と、過ぎぬる方悔しう思さる。物はかけなる小柴を大垣にて、板屋ども邊り邊り、いと假初なめり。黒木の鳥居どもは、さすがに神神しく見え渡されて、煩はしき氣色なるに、神司の者ども、此處彼處に打咳きて、己がどち物打云ひたる氣はひなども、外には様異りて見ゆ。火燒屋敷かに光りて、人氣少なく、潤潤として、此處に物思はしき人の、月日を隔て給へらん程を思し遣るに、いといみじう哀れに心苦し。北の對の然るべき所に立ち隠れ給ひて、御消息聞え給ふに、音聲は皆止めて、心にくき氣はひ數多聞ゆ。何くれの人傳の御消息ばかりにて、自らは對面し給ふべき様にも有らねば、「いと物憂し」と思



して、「斯様の遊行も、今は調和無き程に成りにて侍るを思し知らば、斯う注繻の外にはもてなし給はで、慥せう侍る事をも、明らめ侍りにしがな」と、眞實やかに聞え給へば、人人「げにいと片腹痛く、立ち煩はせ給ふに、いとほしう」など扱ひ聞ゆれば、「いさや、此處の人目も見苦しう、彼の思さん事も若しう、出で居んが今更に慣ましき事」と思すに、いと物憂けれど、情無うもてなさんにも猛からねば、とかく打歎き休らひて、膝行り出で給へる御氣はひ、いと心にくし。此方は「簀子ばかりの許されは侍りや」とて、上り給へり。葦やかに差し出でたる夕月夜に、打振舞ひ給へる様、匂ひ似る物無くめでたし。月頃の積りを、次第しう聞え給へんも、目眩き程に成りにければ、鞠を聊か折りて「不持給へりけるを、差し入れてノ句アリ」「變らぬ色を案内にてこそ、忌垣も越え侍りにけれ。然も心憂く」と聞え給へば、

神垣は櫻の杉も無きものを如何に紛へて折れる樹ぞ

と聞え給へば、

一少女子が邊りと思へば、柳葉の香をなつかしき覺めてこそ折れ

大方の氣はひ煩はしけれど、御座ばかりは引き溜て、長押に押し掛かりて居給へり。心に任せて見奉りつべく、人も慕ひ様に思したりつる年月は、長閑なりつる御心驕りに、然しも思されざりき。また心の中に如何にぞや、損ありて思ひ聞え給ひにし後、はた哀れも冷めつつ、斯く御中も隔たりぬるを、珍らしき御對面の昔覺えたるに、「哀れ」と思し亂るる事限り無し。來し方、行く先思し續けられて、心弱く泣き給ひぬ。女

は「然しも見えじ」と思し靜むれど、え忍び給はぬ氣色を、いよいよ心苦しう、猶思し止まらべき由をぞ聞え給ふめる。月も入りぬるにや、哀れなる空を眺めつつ、恨み聞え給ふに、許多思ひ集め給へる辛さも消えぬべし。やうやう「今は」と思ひ離れ給へるに、「然ればよ」と、なかなか心動きて思し亂る。殿上の若君達など打連れて、とかく立ち煩ふなる庭の立たずまひも、げに艶なる方に專向りたる有様なり。思はし残すこと無き御中らひに、聞え交し給ふ事ども、摸ねびやらん方無し。やうやう明け行く空の氣色、殊更に造り出でたらんやうなり。

曉の別れは何時も露けきを此は世に知らぬ秋の空かな

出で難てに、御手を捉へて休らひ給へる、いみじうなつかし。風いと冷かに吹きて、松蟲の鳴き腹らしたる聲も、折知り顔なるを、然して思ふこと無きだに聞き過し難げなるに、況して理無き御心惑ひどもに、なかなか言も行かぬにや。

大方の秋の別れも悲しきに鳴く音な添へそ野邊の松蟲

悔しき事多かれど甲斐無ければ、明け行く空もはしたなうて出で給ふ。道の程いと露けし。女もえ心強からず、名残哀れにて眺め給ふ。微見奉り給へる月影の御容貌、稍留まれる匂ひなど、若き人人は身に沁めて、過失も爲つべく愛で聞ゆ。「如何ばかりの道にてか、斯かる御有様を見捨てては、別れ聞えん」と、あいなく涙ぐみ合へり。御文、常よりも細やかなるは、思し離くばかりなれど、また打返し定めかね給ふべき事な

らねば、いと申斐無し。男は然しも思さぬ事をだに、情の爲めには能く云ひ續け給ふべかめれば、況して尋常の列には思ひ聞え給はざりし御中の、斯くて背き給ひなんとするを、口惜しうも、いとほしうも思し惱むべし。旅の御装束より初め、人人のまで、何くれの御調度など、殿めしう珍らしき様にて、訪らひ聞え給へど、何とも思されず。輕佻しう心憂き名をのみ流して、あさましき身の有様を、今始めたらんやうに、程近く成るままに、起き臥し歎き給ふ。齋宮は、若き御心に、不定なりつる御出立の、斯く定まり行くを「嬉し」と思したり。世の人は「例無き事」と、非難きも哀れがりも、模様は聞ゆべし。何事も、人に非難き扱はれぬ際は安けなり。なかなか世に抜け出でぬる人の御邊りは、所狭き事多くなん。十六日、桂川にて御禊し給ふ。常の儀式には勝りて、長奉送使など、然らぬ上達部も、やんごとなく覺え有るを遣らせ給へり。院の御心寄せも有ればなるべし。出で給ふ程、大將殿より例の盡きせぬ事ども聞え給へり。掛けまくも畏き御前にとて、木綿に附けて、「鳴神だにこそ、

八洲守る國つ御神も心有らば飽かぬ別れの中を理れ
思ひ給へるに、飽かぬ心地し侍るかな」と有り。いと疑がしき程なれど、御返り有り。宮の御をば、女別當として書かせ給へり。

國つ神空にことわる中ならばなほざり事を先づや正さん
大將は御有様ゆかしうて、内裏にも參らまほしう思せど、打棄てられて見送らんも、人悪ろき心地し給、

ば、思し止まりて、徒然に眺め居給へり。宮の御返りの大人大人しきを、微笑みて見居給へり。「御年の程よりは、をかしうもおはすべきかな」と、尋常ならず、斯様に例に違へる煩はしさに、必ず心掛かる御辭にて、「いと善う見奉り給へつべかりし幼穉なき御程を見ず成りぬること妬けれ。世の中定め無ければ、對面するやうも有りなにかし」など思す。心憎く由ある御氣はひなれば物見車多かる日なり。申の時に内裏に參り給ふ。御息所、御輿に乗り給へるに付けても、父大臣の限り無き筋に思し心ざして、敬侍き奉り給ひし有様變りて、末の世に内裏を見給ふに付けて、物のみ盡きせず哀れに思さる。十六にて故宮に參り給ひて、二十にて後れ奉り給ふ。三十にてぞ今日また九重を見給ひける。

そのかみを今日は掛けじと忍ぶれど心の中に物ぞ悲しき
齋宮は十四にぞ成り給ひける。いと美しくしうおはする様を、置はしう爲たてまつり給へるぞ、いとゆゆしきまで見え給ふを、帝御心動きて、別れの御柵奉り給ふ程、いと哀れにて、委垂れさせ給ひぬ。出で給ふを待ち奉るとて、入省に立て續けたる出車どもの袖口、色合も、目慣れぬ様に心憎き氣色なれば、殿上人どもも、私の別れ惜み多かり。暗う出で給ひて、二條より洞院の大路を折れ給ふ程、二條院の前なれば、大將の君いと哀れに思されて、櫛に挿して、
振り捨てて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の浪に袖は濡れじや
と聞え給へれど、いと暗う物騒がしき程なれば、又の日、關の彼方よりぞ御返し有る。

鈴鹿川八十瀬の浪に濡れ濡れず伊勢まで誰か思ひおこせん
事削きて書き給へるしも、御手いと由由しく聴めきたるに、「哀れなる氣を少し添へ給へ〔因らアリ〕まし
かば」と思す。霧甚く降りて、尋常ならぬ朝ぼらけに、打眺めて獨り言ちおはす。

行く方を眺めも遣らんこの秋は逢坂山を霧な隔てそ
西の野にも渡り給はず、人遣りならず物寂しげに眺め暮し給ふ。況して旅の空は如何に御心盡しなる事多か
りけん。院の御惱み、神無月に成りては、いと重くおはします。世の中に惜み聞えぬ人無し。内裏にも思し
歎きて行幸あり。弱き御心地にも、春宮の御事を返す返す聞えさせ給ひて、次には大將の御事、「侍りつる世
に變らず、大小の事を隔てず、何事も御後見と思せ。難の程よりも世を政たんにも、をさをさ憚り有るま
じうなん見給ふる。必ず世の中保つ相ある人なり。然るに由りて煩はしさに、皇子にも成さず、常人にて、
朝廷の御後見を爲させんと思ひ給へしなり。其心違へさせ給ふな」と、哀れなる御遺言ども多かりけれど、
女の摸ねぶべき事にし有らねば、此片端に片腹痛し。帝も「いと悲し」と思して、更に遠へ聞えさせたましき
由を、返す返す聞えさせ給ふ。御容貌もいと清らに、成長増さらせ給へるを、嬉しく頼もしく見奉らせ給ふ。
限り有れば急ぎ還らせ給ふにも、なかなかなる事多くなん。春宮も一度にと思召しけれど、物騒がしきに出
り日を更へて渡らせ給へり。御年の程よりは大人び美しくしき御様にて、「戀し」と思ひ聞えさせ給ひける積
りに、何心も無く「嬉し」と思して見奉らせ給ふ御氣色、いと哀れなり。中宮は涙に沈み給へるを見奉ら

せ給ふも、ちまごま御心亂れて思召さる。萬づの事を聞え知らせ給へど、いと物はかなき御程なれば、
「聞いたく悲し」と見奉らせ給ふ。大將にも、朝廷に仕うまつらせ給ふべき御心遣ひ、此宮の御後見し給ふ
べき事を、返す返す言はず。夜更けてぞ歸らせ給ふ。残る人無く仕うまつりて暗騒る様、行幸に劣る差別無
し。飽かぬ程にて還らせ給ふを、いみじう思召す。大后も参り給はんとするを、中宮の斯く添ひおはする
に御心置かれて、思し休らふ程に、おどろおどろしき様にもおはしませで、崩れさせ給ひぬ。足を空に思
ひ惑ふ人多かり。御位を去らせ給ふと云ふばかりにこそ有れ、世の政を静めさせ給へる事も、我が御代の
同じ事にておはしまいつるを、帝はいと若うおはします。祖父大臣、いと急に不善うおはして、「其御儘に
成りなん世を、如何ならん」と、上達部、殿上人皆思ひ歎く。中宮、大將殿などは、況して勝れて物も思し
分かれず。後後の御わざなど、孝じ仕うまつり給ふ様も、許多の御子達の御中に勝れ給へるを、道理なが
ら、いと哀れに世の人も見奉る。藤の御衣に覆れ給へるに付けても、限り無く清らに心苦しげなり。去年
今年と打續き、斯かる事を見給ふに、世もいとあぢきなる思さるれば、斯かる序にも先づ思し立たる事は
有れど、また様様の御躰多かり。御四十九日までは、女房〔不御〕御息所たち、皆院に集ひ給へりつるを、
過ぎぬれば、散り散りに退かて給ふ。十二月の廿日なれば、大方の世の中閉ぢむる空の氣色に付けても、
況して晴るる世無き中宮の御心の中なり。大后の御心をも知り給へれば、心に任せ給へらん世の、はしたな
く住み憂からんを思すよりも、馴れ聞え給へる年頃の御有様を思ひ出で聞え給はぬ時の間無きに、斯くても

おはしますまじう、皆外へと出で給ふ程、悲しき事限り無し。宮は三條の宮に渡り給ふ。御迎に兵部卿の宮参り給へり。雪打散り風烈しうて、院の中やうやう人目離れ行きて、驚やかなるに、大將殿此方に参り給ひて、舊き御物語聞え給ふ。御前の五葉の雪に萎れて、下葉枯れたるを見給ひて、親王、

藍廣み頼みし松や枯れにけん下葉散り行く年の暮かな

何ばかりの事にも有らぬに、折から物哀れにて、大將の御袖甚う濡れぬ。池の隈無う氷れるに、

研えわたる池の鏡の明光きに見馴れし影を見ぬぞ悲しき
と思すままに、餘り若若しうぞ有るや。王命婦、

年暮れて岩井の水も氷閉ち見し人影の顔せも行くかな

其序にいと多かれど、然のみ書き讀くべき事かは。渡らせ給ふ儀式異らねど、思ひ成しに哀れにて、舊き宮は却りて旅の心地し給ふにも、御里住み絶えたる年月の程思し廻らざるべし。年復りぬれど、世の中今めかしき事無く静かなり。況して大將殿は物憂くて籠り居給へり。除目の頃など、院の御時をば更にも云はず、年頃劣る差別無くて、御門の邊り所無く立ち込みたりし馬、車薄らぎて、侍所に宿直物の袋をさを見えず。親しき家司どもばかり、殊に急事無げにて有るを見給ふにも、「今よりは斯くこそは」と思ひ遣られて、物荒涼じくな。御原宮殿は二月に向侍に成り給ひぬ。院の御思ひに、やがて尼に成り給へる代りなりけり。やんごとなくもてなして、人柄もいと善くおはすれば、あまた参り集まり給ふ中にも、勝れて

時めき給ふ。后は里がちにおはしまして、参り給ふ時の御局には梅壺を爲たれば、弘徽殿には尙侍の君住み給ふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしう成りて、女房なども數知らず集ひ参りて、今めかしう華やき給へど、御心の中は、思ひの外なりし事どもを忘れ難く思ひ歎き給ふ。いと忍びて通はし給ふ事は、猶同じき様なるべし。「物の聞えも有らば如何ならん」と思しながら、例の御辭なれば、今しも御志増さるべかめり。「院のおはしまいつる世こそ憶り給ひつれ、后の御心いち早くて、かたがた思し詰めたる事ども「報いせん」と思すべかめり。事に觸れて、はしたなき事のみ出で来れば、斯かるべき事とは思ししかど、見知り給はぬ世の憂さに、立ちまふべくも思されず。左大臣も荒涼じき心地し給ひて、殊に内裏にも参り給はず。故姫君を引き除きて、此大將の君に聞え付け給ひし御心を、后は思し控て、宜しうも思ひ聞え給はず。大臣の御中も固より側側しうおはするに、故院の御代には、我が儘におはせしを、時移りて爲たり能におはするを、「あぢきなし」と思したるも道理なり。大將は、有りしに變らず渡り通ひ給ひて、侍ひし人人をも、なかなか細かに思し控て、若君を愛護き思ひ聞え給へる事限り無ければ、「哀れに有り難き御心」と、いと勞き聞え給ふ事ども同じ様なり。限り無き御おぼえの餘り物騒がしきまで暇無げに見え給ひしを、通ひ給ひし所も、かたがたに絶え給ふ事ども有り。輕輕しき御忍び遊行も、あいなう思し成りて、殊に爲給はねば、いと長閑やかに、今しも有らまほしき御有様なり。西の對の姫君の御幸ひを世の人も愛で聞ゆ。少納言なども人知れず、故尼上の御祈禱の驗と見奉る。父親王も思ふ様に聞え交し給ふ。嫡腹の「限

り無く」と思は、はかばかしうも有らぬに、妬げなる事多くて、繼母の北の方は、安からず思すべし。昔物語に殊更に作り出でたるやうなる御有様なり。齋院は御服にて、下り給ひにしかば、朝顔の姫君は代りに居給ひにき。加茂の齋院には孫王の居給ふ例多くも有らざりけれど、然るべき女親王はおはせざりけん。大將の君、年月経れど猶御心離れ給はざりつるを、斯う筋殊に成り給ひぬれば「口惜し」と思す。中將に言づれ給ふ事も同じ事にて、御文などは絶えざるべし。昔に變る御有様などをば、殊に何とも思したらず。斯様のはかなし事どもを、紛るること無きままに、此方彼方と思し惱めり。帝は院の御遺言違へず、哀れに思したれど、若うおはします上にも、御心離びたる方に過ぎて、強き所おはしますめなるべし。母后、太政大臣、とりどりに爲給ふ事は、え背き給はず。世の政、御心に適はぬやうなり。煩はしさのみ増されど、尙侍の君は人知れぬ御志通へば、理無くても覺東なくは有らず。五壇の御修法の初めに、憤みおはします隙を窺ひて、例の夢のやうに聞え給ふ。彼の昔覺えたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れ奉る。人目も緊き所「口煩」なれば、常よりも端近なるを、そら怖ろしう覺ゆ。朝夕に見奉る人だに飽かぬ御有様なれば、況して珍らしき程にのみ有る御對面の如何でかは疎かならん。女の御様もげにぞめでたき御感りなる。重りかなる方は如何が有らん。をかしく艶めき若びたる心地して、見まほしき御氣はひなり。「程無く明け行くにや」と覺ゆるに、唯だ此處にしも「宿直申し侍ふ」と聲作るなり。また此邊りに隠るへたる近衛司ぞ有るべき。「御極き儀望の教へ令來するぞかし」と大將は聞き給ふ。をかしきものから煩らはし。此處彼處

尋ね歩ききて、「實一つ」と申すなり。女君、

心からかたがた袖を濡らすかな明くと教ふる聲に付けても
と述給ふ様、はかなだちて、いとをかし。

歎きつつ我世は斯くて過ぐせとや胸の明くべき時ぞとも無く
靜心無くて出で給ひぬ。夜深き曉、月夜のえも云はず霧渡れるに、いと甚う寒れて振舞ひ成し給へるしも、
似る物無き御有様にて、承香殿の御兄の頭、中將、藤壺より出でて、月の少しく隈ある立籠の下に立てりけるを、知らで過ぎ給ひけんこそいとほしけれ。非難き聞ゆる様も有りなにかし。斯様の事に付けて、もて離れ、冷然き人の御心を、且つは「めでたし」と思ひ聞え給ふものから、我心の引く方にては、猶「辛う、心憂し」と覺え給ふ折多かり。内裏に参り給はん事は、初初しく所狭く思し成りて、春宮を見奉り給はぬを、覺東なく覺え給ふ。また頼もしき人も物し給はねば、唯だ此大將の君をぞ萬づに頼み聞え給へるに、猶此の憎き御心の止まぬに、ともすれば御腕を潰し給ひつつ、聊かも氣色を御覺じ知らず成りにしを、思ふだにいと怖ろしきに、今更にまた然る事の聞え有りて、我身は然るものにて、「春宮の御爲めに必ず善からぬ事出で来なん」と思すに、いと怖ろしければ、御祈禱をさへ爲させて、「此事思ひ止ませ奉らん」と、思し至らぬこと無く遁れ給ふを、如何なる折にか有りけん、あさましうて近づき参り給へり。心深く巧計り給ひけん事を知る人無かりければ、夢の様にぞ有りける。摸ねぶべき様も無く聞え續け給へど、宮いと此上

無く持て離れ給ひて、果て果ては御胸を痛う惱み給へば、近う侍ひつる命婦、辨などぞ、あさましう見奉り扱ふ。男は、「憂し、辛し」と思ひ聞え給ふ事限り無きに、來し方、行く先、かき昏す心地して、現實心も失せにければ、明けぬにけれど出で給はず成りぬ。御懐みに驚きて、人人近う参りて驚らば、我にも有らで塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地ども、いと煩かし。宮は物を「いと危びし」と思しけるに、御氣上がりて、猶惱ましう爲させ給ふ。兵部卿宮、大夫など参りて、「僧召せ」など語くを、大將いと危びしう聞きおはす。辛うじて暮れ行く程にぞ歸り給へる。斯く籠り居給へらんとは思しも掛けず、人人もまた「御心惑はさじ」とて、「斯くなん」とも申さぬなるべし。晝の御座に睦行り出でておはします。「宜しう思さるるなめり」とて、宮も退かで給ひなとして、御前人少なに成りぬ。例も氣近く慣らさせ給ふ人少なければ、此處彼處の物の後ろなどにぞ侍ふ。命婦の君などは、「如何に巧計りて出だし奉らん、今宵さへ御氣上がらせ給はん。いとほしう」など打私語き扱ふ。君は塗籠の戸の細目に開きたるを、やをらし押し開けて、御屏風の隙間に傳ひ入り給ひぬ。珍らしう嬉しきにも、涙は落ちて見奉り給ふ。「猶いと苦しうこそ有れ、世や盡きぬらん」とて、外の方を見出だし給へる傍目、云ひ知らず艶めかしう見ゆ。「御菓子をだに」とて参り居えたり。箱の蓋などにも、なつかしき標にて有れど、見入れ給はず。世の中を甚う思し惱める氣色にて、長閑に眺め入り給へる、いみじうらうたげなり。響、頭附、御髪掛の掛かりたる様、限り無き匂はしさなど、唯だ彼の對の姫君に違ふ所無し。年頃少し思ひ忘れ給へりつるを、「あさましきまで肖似え

給へるかな」と見給ふままた、少し物思ひの晴け所ある心地し給ふ。氣高う耻かしげなる標なども、更に他人と思ひ分き難きを、猶限り無く思ひ沁め聞えてし心の思ひ成しにや、「標殊にいみじう成長増さり給ひけるかな」と、類ひ無く覺え給ふに、心惑ひして、やをら御帳の内に關づらひ入りて、御衣の襖を引き鳴らし給ふ氣はひ著く、さと匂ひたるに、あさましう非興けう思されて、やがてひれ伏し給へり。「見たに向き給へかし」と、心病ましう辛うて、引き寄せ給へるに、御衣を滑べし置きて、睦行り退き給ふに、心にも有らず、御髪取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世の程思し知られて、「いみじ」と思したり。男も、許多世を持て静め給ふ御心皆亂れて、現實標にも有らず、萬づの事を泣く泣く恨み聞え給へど、「眞に心づきなし」と思して、御答も聞え給はず。唯だ「心地のいと惱ましきを、斯からぬ折も有らば聞えてん」と述給へど、盡きせぬ御心の程を云ひ續け給ふ。さすがに「いみじ」と聞き給ふしも交るらん、有らざりし事には有らねど、改めていと口惜しう思さるれば、なつかしきものから、いと善う述給ひ通れて、今宵も明け行く。せめて隨ひ聞えざらんも、忝く、心恥かしき御氣はひなれば、「唯だ斯ばかりにても、時時いみじき憂へをだに晴るけ侍りぬべくは、何のおほけなき心も侍らじ」など、強め聞え給ふべし。斜なる事だに、斯標なる中らひは、哀れなる事も添ふなるを、況して類ひ無げなり。明け果つれば、二人して、いみじき事どもを聞え、宮は、半亡きやうなる御氣色の心苦しければ、「世の中に有りしと聞し召されんも、いと恥かしければ、やがて亡せ侍りなんも、また此世ならぬ罪と成り侍りぬべき事」など聞え給ふも、非興けきまで思し入

れり。

逢ふ事の難きを今日に限らずは今幾世をか歎きつつ經ん

「御願許にもこそ」と聞え給へば、さすがに打歎き給ひて、

長き世の恨みを人に残しても且つは心を浮華と知らなん

はかなく云ひ成させ給へる様の、云ふ由無き心地すれど、人の思さん所も、我が御爲めも苦しければ、我にも有らで出で給ひぬ。「何處を面にてか又も見え奉らん、いとほしと思し知るばかり」と思して、御文も聞え給はず。打絶えて内裏、春宮にも参り給はず、罷りおはして、起き臥し「いみじかりける人の御心かな」と人悪ろく戀しう悲しきに、心、魂も失せにけるにや、惱ましうさへ思さる。物心細く、「何ぞや世に經れば、憂さこそ増れ」と思し立つには、此女君のいとらうたげにて、哀れに打頼み聞え給へるを、振り捨てん事いと難し。宮も其の名残例にもおはしませず。斯う殊更めて罷り居、言つれ給はぬを、命婦などはいとほしがり聞ゆ。宮も、春宮の御爲めを思すには、御心置き給はん事いとほしく、「世をあぢきなきものに思ひ成り給はば、直道に思し立つ事もや」と、さすがに苦しう思さるべし。「斯かる事絶えずば、いとどしき世に、憂き名さへ潤り出でなん。大后の有るまじき事に宜ふなる。位をも去りなん」と、やうやう思成る。院の思し宜はせし標の斜ならざりしを思し出づるにも、「萬づの事、有りしにも有らず、變り行く世にこそ有めれ。戚夫人の見けん日のやうには有らずとも、必ず人笑へなる事は有りぬべき身にこそ有めれ」

など、疎ましう過ぐし難う思さるれば、背きなん事を思し取るに、春宮見奉らで、面變りせん事哀れに思さるれば、忍びやかにて参り給へり。大將の君は、然らぬ事だに思し寄らぬ事無く仕うまつり給ふを、御心地偶ましきに言託けて、御送にも参り給はず。大方の御訪らひは同じやうなれど、「無下に思し屈しにける」と、心知るとちはいとほしがり聞ゆ。宮はいみじう美しく大人び給ひて、「珍らしう嬉し」と思して陸れ聞え給ふを、「愛し」と見奉り給ふにも、思し立つ筋はいと難げなれど、内裏邊りを見給ふに付けても、世の有様哀れにはかなく、移り變る事のみ多かり。大后の御心もいと煩はしうて、斯く出で入り給ふにもはしたなく、事に觸れて苦しければ、宮の御爲めにも危く忌忌しう、萬づに付けて思ほし亂れて、「御覽せで久しからん程に、容貌の異様にて、憂たてげに變りて侍らば、如何が思さるべき」と聞え給へば、御顔を打凝視り給ひて、「式部がやうにや、如何でか然は成り給はん」と、笑みて述べ給ふ。云ふ甲斐無く哀れにて、「其れは老いて侍れば醜きぞ。然は有らで、髪は其れよりも短くて、黒き衣などを着て、夜居の僧のやうに成り侍らんとすれば、見奉らん事も、いとど久しかるべきぞ」と泣き給へば、眞實だちて、「久しうおはせねば、戀しきものを」とて、涙の落つれば「耻かし」と思して、さすがに背き給へり。御髪はゆらゆらと清らにて、眸のなつかしげに匂ひ給へる様、大人び給ふままに、唯だ彼の御顔を脱ぎ滑べ給へり。御齒の少し朽ちて、口の中黒みて、笑み給へる黠美くしきは、女にて見奉らまほしう清らなり。「いと斯うしも肖似え給へるこそ心憂けれ」と、玉の瑕に思さるるも、世の煩はしさの空恐ろしう覺え給ふなりけり。大將の君は、宮

をいと戀しう思ひ聞え給へど、「あさましき御心の程を、時時は思ひ知る様にも見せ奉らん」と念じつつ過ぐし給ふに、人悪く徒然に思さるれば、秋の野も見給ひがてら、雲林院に参うで給へり。故母御息所の御兄の律師の籠り給へる坊にて、「法文など讀み、行ひせん」と思ひて、「二三日おはするに、哀れなる事多かり。紅葉のやうやう色づき渡りて、秋の野のいと艶めきたるなど見給ひて、故郷も忘れぬべく思さる。法師輩の才ある限り召し出でて、論議せさせて聞し召させ給ふ。所柄に、いとど世の中の常無きを思し明かしても、「猶曼き人しもぞ」と思し出でらるる。おし明け方の月影に、法師輩の閑伽奉るとて、からからと鳴らしつつ、菊の花、濃き薄き紅葉など、折り散らしたるもはかなけれど、此方の營みは、此世も徒然ならず、後の世はた頼もしげなり。「然もあぢきなき身を持つて憫むかな」など思し續け給ふ。律師のいと尊き聲にて、「念佛衆生、攝取不捨」と打述べて、行ひ給へるがいと羨ましければ、「何ぞや」と思し成るに、先づ姫君の心に掛かりて思ひ出でられ給ふぞ、いと恋ろき心なるや。例ならぬ日數も、覺束なくのみ思さるれば、御文ばかりぞ繁う聞え給ふめる。「行き離れぬべしやと、試み侍る道なれど、徒然も慰め難う、心細さ増さりてなん。聞き舍したる事ありて、休らひ侍る程を如何に」など、陸奥紙に、打解け書き給へるさへぞめでたき。

浅茅生の露の宿りに君を置きて四方の嵐ぞ靜心無き
など細やかなるに、女君も打泣き給ひぬ。御返し 白き色紙に、

風吹けば先づぞ亂るる色變る浅茅が露に掛かる蜘蛛

とのみ有り。御手は「いとをかしうのみ成り増さる物かな」と、獨言ちて、「美しく」と微笑み給ふ。常に書き交し給へば、我が御手にいと善く似て、今少し艶めかしう、女しき所書き添へ給へり。何事に付けても「怪しうは有らず、生ふし立てたりかし」と思ほす。吹き交ふ風も近き程にて、齋院にも聞え給ひけり。中将の君に、「斯く旅の空になん物思ひに漫行がれにけるを、思し知るにも有らじかし」など恨み給ひて、御前には、

掛けまくは畏けれどもそのかみの秋思ほゆる木綿禪かな

「昔を今にと思ひ給ふるも甲斐無く、取り返されん物のやうに」と、馴れ馴れしげに、唐の浅緑の紙に、禪に木綿附けなど、神神しう爲なして参らせ給ふ。御返し、中将、「紛るる事無くて、來し方の事を思ひ給へ出づる徒然のままには、思ひ遣り聞えさする事多く侍れど、甲斐無くのみなん」と、少し心留めて多かり。御前のは、木綿の端に、

そのかみや如何がは有りし木綿禪心に掛けて忍ぶらん故

「近き世に」とぞ有る。御手細やかに有らねど、らうらうしう、草などをかしう成りにけり。「況して朝顔も成長勝り給へらんかし」と思ひ遣るも尋常ならず。「怖ろしや、哀れ此頃ぞかし、野の宮の哀れなりし事」と思し出でて、「怪しう様のもの」と神恨めしう思さるる御癖の見苦しきぞかし。理無う思さば、然も有り

ゆべかりし年頃は、長閑に過ぐい給ひて、今は悔しう思はさるべかめるも、奇しき御心なりや。院も、斯く尋常ならぬ御心ばへを見知り聞え給へれば、稀疎なる御返しなどは、えしも持て離れ聞え給ふまじかめり。少しあいなき事なりかし。六十巻と云ふ經文讀み給ひ、覺束なき所所解かせなどしておはしますを、山寺には「いみじき光行ひ出だし奉れる」と、「佛の御面目なり」と、卑しの法師輩まで喜び合へり。齋やかにて、世の中を思し續くるに、歸らん事も物憂かりゆべけれど、一人の御事思し遣るが羅網なれば、久しうもえ在りませで、寺にも御誦經散めしう爲させ給ふ。有るべき限り上下の僧ども、其邊りの山麓まで物賜び、尊き事の限りを盡して出で給ふ。見奉り送ると、此面彼面に卑しき咳ふるひ人ども集まり居て、「涙を落しつゝ見奉る。黒き御車の中にて、藤の御袂に覆れ給へれば、殊に見え給はわど、微かなる御有様を、世に無く思ひ聞ゆべかめり。女君は、日頃の程に成長増さり給へる心地して、いと甚う静まり給ひて、「世の中如何が有らん」と思へる氣色の、心苦しう哀れに覺え給へば、あいなき心の、襟襟亂るるや著からん。「色變る」と有りしもうたう覺えて、常より殊に語らひ聞え給ふ。山芭に持たせ給へりし紅葉、御前に御覽じ比ぶれば、殊に染め増しける露の心も見過ぐし難う、覺束なきも人悪ろきまで覺え給へば、唯だ大方にて宮に參らせ給ふ。命婦の許に、「入らせ給ひにけるを、珍らしき事と承るに、宮の間の事、覺束なく成り侍りにければ、靜心無く思ひ給へながら、行ひも動めんなど思ひ立ち侍りし日數を、心ならずやとてなん日頃に成り侍りにける。紅葉は一人見侍るに、錦暗う思ひ給ふればなん。折好くて御覽せさせ給へ」など有り。

けにいみじき枝どもなれば、御目留まるに、例の聊かなる物ありけり。人人見奉るに、御顔の色も移るひて、「猶斯かる心の絶え給はぬこそいと疎ましけれ。あたら思ひ遣り深う物し給ふ人の、ゆくりなく、斯様な事折交せ給ふを、人も怪しと見るらんかし」と、心づき無う思されて、瓶に挿させて、廂の柱の下に押し遣らせ給ひつ。大方の事ども、宮の御事に觸れたる事などをば、打頼める様に、直よかなる御返りばかり聞え給へるを、「然も心賢く、盡きせず」とは恨めしうは見給へど、何事も後見聞え慣らひ給ひにたれば、「人怪しと見咎めもこそすれ」と思して、退かて給ふべき日參り給へり。先づ内裏の御方に參り給へれば、長閑やかにおはします程にて、昔今の御物語聞え給ふ。御容貌も、院にいと善う似奉り給ひて、今少し艶めかしき氣添ひて、なつかしう柔和にぞおはします。互に「哀れ」と見奉り給ふ。尙侍の君の御事も、絶えぬ様に聞し召し、氣色御覽する折も有れど、「何かは、今始めたる事ならばこそ有らめ。有り初めにける事なれば、さも心交さんに似け無かるまじき人の關係なりかし」とぞ思し成して、咎めさせ給はざりける。萬づの御物語、文の道の覺束なく思さるる事どもなど、問はせ給ひて、又好色しき歌謡なども、互に聞えさせ給ふ程に、彼の齋宮の下り給ひし日の事、容貌のをかしくおはせしなど、語らせ給ふに、我も打解けて、野の宮の哀れなりし、曙も、皆聞え出で給ひてけり。二十日の月やうやう射し出でて、をかしき程なるに、「音楽なども爲まほしき程かな」と宣はす。「中宮の今宵退かて給ふなる訪らひに物し侍らん。院の宣はせ置く事侍りしかば、また後見仕うまつる人も侍らざるに、春宮の御由縁、いとほしう思ひ給へられ侍り

て」と奏し給ふ。「春宮をば今の皇子に爲してなど、宣はせ置きしかば、取り分きて心ざし物すれど、殊に差し分きたる標にも、何事をかはとてこそ。年の程よりは御手などの、わざと賢うこそ物し給ふべけれ。何事にもはかばかしからぬ、自らの面起しに」など宣はすれば、「大方爲給ふわざなど、いと敏く大人びたる様に物し給へど、まだいと片生に」など、その御有様も奏し給ひて、退かて給ふに、大宮の御兄の藤大納言の子の頭の辨と云ふが、世に合ひ華やかなる若人にて、思ふ事無きなるべし、妹の麗景殿の御方に行くに、大將の御光脚を忍びやかに追へば、暫し立ち留まりて、「白虹日を買けり、太子怖ぢたり」と、いと緩「困ゆるら」かに打誦したるを、大將「いと目眩し」と聞き給へど、咎むべき事かは。後の御氣色は、いと怖ろしう煩はしげにのみ聞ゆるを、斯う親しき人人も、氣色だち云ふべかめる事どもも有るに、煩はしう思されけれど、冷然うのみもてなし給へり。「御前に侍ひて、今まで更かし侍りにける」と聞え給ふ。月の華やかなるに、「昔斯様なる折は、御音楽爲させ給うて、今めかしうもてなさせ給ひし」など思し出づるに、同じ御垣の内ながら、變れる事多く悲し。

九重に霧や隔つる雲の上の月を遙かに思ひ遣るかな

と命婦して聞え傳へ給ふ。御氣はひも微かなれど、なつかしう聞ゆるに、辛さも忘れられて、先づ涙ぞ落つる。

月影は見し世の秋に變らぬを隔つる霧の冷淡くも有るかな

「貴人のとか、昔も侍りける事にや」など聞え給ふ。宮は、春宮を飽かず思ひ聞え給ひて、萬づの事を聞えさせ給へど、深うも思し入れたらぬを、いと關心たく思ひ聞え給ふ。例はいと疾く大駭驚るを、「出で給ふまでは、起きたらん」と思すなるべし。怨めしげに思したれど、さすがにえ慕ひ聞え給はぬを、「いと哀れ」と見牽り給ふ。大將、頭の辨の誦しつる事を思ふに、御心の鬼に、世の中煩はしう覺え給ひて、尙侍の君にも音づれ聞え給はで、久しく成りにけり。初時雨何時しかと氣色だつ日、如何が思しけん、彼れより、

木枯の吹くに付けつつ待ちし間に覺東なさの頃も經にけり

と聞え給へり。折も哀れに、あながちに忍び書き給ひつらん、御心ばへも憎からねば、御使止めさせ給ひて、唐の紙ども入れさせ給へる御厨子、聞かせ給ひて、尋常ならぬを運り出でつつ、筆なども心殊に引き装ひ給へる氣色艶なるを、御前なる人人、「誰ばかりならん」と突きじろふ。「聞えさせても、甲斐無き物態りにこそ、無下に屈ほれにけれ。身のみ物憂き程にて、

相見ずて忍ぶる頃の涙をもなべての秋の時雨とや見る

「心の通ふならば、如何に眺めの空も物忘れし侍らん」など、細やかに成りにけり。斯様に驚かし聞ゆる類ひ多かれど、情無からず打返り言ち給ひて、御心には深う沁まざるべし。中宮は院の御一周忌の事に打掃き、御八講の準備を、様様に心遣ひ爲させ給ひけり。十一月の朔日頃、御國忌なるに、雪甚う降りたり。大將殿より宮に聞え給ふ。

別れにし今日は来れども見し人に行き逢ふ程を何時と頼まん
何處にも、今日は物悲しう思さるる程にて、御返り有り。

長らふる程は憂けれど行き廻り今日は其世に逢ふ心地して
殊に装ひても有らぬ御書き様なれど 貴に氣高きは思ひ成しなるべし。筋變り今めかしうは有らねど、人に
は異に書かせ給へり。今日は此御事も思ひ消ちて、哀れなる雪の霽に濡れ濡れ行ひ給ふ。十二月十餘日はか
り、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日目に供養させ給ふ御經より初め、玉の軸、羅の表紙、鉄寶の飾
りも、世に無き様に調へさせ給へり。然らぬ事の清らだに 世の常ならずおはしませば、況して道理なり。
佛の御飾り、花机の覆ひなどまで、眞の極樂思ひ遣らる。初めの日は先帝の御料、次の日は母後の御爲め、
又の日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世の慣ましさを、えしも憚かり給はで、いと數多參り
給へり。今日の講師は、心殊に遷らせ給へれば、新懸る程より打初め、「同じう云ふ言の葉も、いみじう尊
し。親王達も様様の寶物捧げて繰り給ふに 大將殿の御用意など猶似るもの無し。常に同じ事の様なれど
も、見奉る度毎に珍らしからんをば、如何がはせん。果ての日は、我が御事を結願にて、世を背き給ふ由佛
に申させ給ふに、皆人人驚き給ひぬ。兵部卿の宮、大將の御心も動きて、「あさまし」と思す。皇子は半の程
に立ち入り給ひぬ。心強う思し立つ様を述給ひて、果つる程に、山の座主召して、忌む事受け給ふべき由
述給はず。御叔父の横川の僧都近う參り給ひて 御髪下ろし給ふ程に、宮の中掬動りて、忌忌しう泣き滿ち

たり。何と無き老い衰へたる人だに、「今は」と世を背く程は、怪しう哀れなるわざを、況して、漢ての御氣
色にも出だし給はざりつる事なれば、皇子もいみじう泣き給ふ。參り給へる人人、大方の事さまも哀れに尊
ければ、皆袖濡らしてぞ歸り給ひける。故院の親王達は、昔の御有様を思し出づるに、いとど哀れに悲しう
思されて、皆訪らひ聞え給ふを、大將は立ち止まり給ひて、聞え出で給ふべき方も無く、昏れ惑ひて思さる
れど、「何とかなしも」と人見奉るべければ、親王など出で給ひぬる後にぞ、御前に參り給へる。やうやう人
静まりて、女房ども鼻打かみつつ、所所に群れ居たり。月は隈無きに、雪の光り合ひたる庭の有様も、昔
の事思ひ遣らるるに、いと堪へ難う思さるれど いと能う思し靜めて、「如何やうに思し立たせ給ひて、斯
う俄かには」と聞え給ふ。「今初めて思ひ給ふる事にも有らぬを、物騒がしきやうなりつれば、心亂れぬべ
く」など、例の命婦して聞え給ふ。御簾の中の氣はひ、其處ら集ひ給ふ人の、衣の音なひ蕭やかに振舞ひ成
して、打身動きつつ、悲しげさの慰め難げに、洩り聞ゆる氣色、「道理にいみじ」と聞き給ふ。風烈しう吹
き吹雪きて、御簾の中の匂ひ、いと物深き黒方に沁みて、名香の煙も微かなり。大將の御匂ひさへ蕭り合
ひ、めでたく極樂思ひ遣らるる夜の様なり。春宮の御使も參れり。述給ひし様思ひ出で聞えさせ給ふにぞ、
御心強さも堪へ難くて、御返りも聞えさせ遣らせ給はねば、大將ぞ言加へ聞えさせ給ひける。誰も誰も有る
限り、心治らぬ程なれば、思す事どもは打出で給はず。
月の澄む雲居を掛けて慕ふとも此夜の闇に猶や惑はん

「と思ひ給へらるこそ、甲斐無く、思立たせ給ひつる親まじきは、限り無う」とばかり聞え給ひて、人近う侍へば、さまざま亂るる心の中をだに、え聞え願はし給はず。慥せし。

大方の憂きに付けては厭へども何時か此世を背き果つべき

「且つ濁りつつ」など、半分は御使の心しらひたるべし。哀れのみ盡きせねば、胸苦しうて退かて給ひぬ。殿にても、我が御方に一人打臥し給ひて、御目も合はず、世の中厭はしう思さるるにも、春宮の御事のみぞ苦しき。「母宮をだに、公さまにと思し置きてしを、世の憂きに堪へず、斯く成り給へば、舊の御位にてもえおはせじ。我さへ見奉り捨てては」など思し明すこと限り無し。今は「斯かる方さまの御調度どもをこそは」と思せば、年の内にと準備せ給ふ。命婦の君も御供に成りにければ、其れも心深う訪らひ給ふ。詳しく云ひ續けんに事しき様なれば、漏してけるなめり。然るは斯様の折こそ、をかしき歌など出で来るやうも有れ、蕭蕭しや。参り給ふも今は慥まじき薄らぎて 御自ら聞え給ふ折も有りけり。思ひ染めてし事は更に御心に離れねど、況して有るまじき事なりかし。年も換りぬれば、内裏邊り華やかに、内宴、踏歌など聞き給ふにも、物のみ哀れにて、御行ひ蕭やかに爲給ひつつ、後の世の事をのみ「不思議にノ語アリ 福もしく、煩かしかりし事離れて思さる。常の御念誦堂をば然るものにて、殊に建てられたる御堂の西の對の南に當りて、少し離れたるに渡らせ給ひて、取り分きたる御行ひ爲させ給ふ。大将参り給へり。改まる證も無く、宮の中長閑に人目稀れにて、宮司どもの親しきばかり、打頂低れて、見成しにや有らん、屈し甚げに思へり。

白馬ばかりぞ繪奉き變へぬ物にて、女房などの見ける。所狭う参り集ひ給ひし上達部など、道を避きつつ参き過ぎて、向ひの大殿に集ひ給ふを、「斯かるべき事なれ」と、哀れに思さるるに、千人にも代へつべき御標にて、深う尋ね参り給へるを見るに、あいなく涙ぐまる。客人も、いと物哀れなる氣色に打見廻し給ひて、頼に物も述給はず。襟巻れる御住居に、御儀の端、御几帳も青鈍にて、障障より微見えたる薄鈍、山柵子の袖口など、なかなか眺めかしう、奥ゆかしう思ひ遣られ給ふ。解け渡る池の薄氷、岸の柳の氣色ばかりは、「時を忘れぬ」など、さまざま眺められ給ひて、「宜べも心有る」と忍びやかに打誦し給へる、又無う慥めかし。

長海布刈る海人の住所と見るからに先づ潮垂るる松が浦島

と聞え給へば、奥深うも有らず、皆佛に譲り聞え給へる御座所なれば、少し氣近き心地して、有りし世の名残だに無き浦島に立ち寄る浪の珍らしきかな

と述給ふも微聞ゆれば、忍ぶれど、涙ほろほろと溢れ給ひぬ。世を思ひ澄ましたる尼君達の見らんもはしたなければ、言少なにて出で給ひぬ。「然も類ひ無く成長増さり給ふかな。心もとなき所無く世に榮え時に合ひ給ひし時は、然る一つ物にて、何に付けてか世を思し知らんと、推し量らせ給ひしを、今はいと甚う思し靜めて、はかなき事に付けても、物哀れなる氣色さへ添はせ給へるは、あいなく心苦しうも有るかな」など、老いしらへる人人、打泣きつつ愛で聞ゆ。宮も思し出づる事多かり。司召の頃、此宮の人は賜はるべ

き官も得ず、大方の道理にても、宮の御給りにても、必ず有るべき加階などをだに爲すなどして、歎く類ひいと多かり。斯ても、何時しかと御位を去り、御封などの留まるべきにも有らぬを、言託けて變る事多かり。皆豫て思し捨ててし世なれど、宮人どもも寄所無げに、「悲し」と思へる氣色どもに付けてぞ、御心動く折折有れど、「我身を無きに成しても、東宮の御代を平安におはしますまば」とのみ思しつ、御行ひ弛意み無く勤めさせ給ふ。人知れず、危くゆゆしう思ひ聞えさせ給ふ事し有れば、「我に其罪を輕めて宥し給へ」と、佛を念じ聞え給ふに、萬づを慰め給ふ。大將も、然か見奉り給ひて、道理に思す。此殿の人どももまた同じ様に辛き事のみ有れば、世の中はしたな思されて籠りおはす。左大臣も、公私引き變へたる世の有様に、物憂く思して、致仕の表奉り給ふを、帝は、故院の、やんごとなく重き御後見と思して、長き世の固めと聞え置き給ひし御遺言を思召すに、捨て難きものに思ひ聞え給へるに、「甲斐無き事」と度度用ひさせ給はねど、せめて返さひ申し給ひて、籠り居給ひぬ。今はいと一族のみ返す榮え給ふ事限り無し。世の重しと物し給へる左大臣斯く世を遁れ給へば、朝廷も心細ら思され、人も心ある限りは歎きけり。御子どもは何れとも無く、人から日安く世に用ひられて、心地好げに物し給ひしを、此上無う静まりて、三位中將なども世を思ひ沈める様此上無し。彼の四の君をも猶離れ離れに打通ひつ、日覺ましう持てなされたれば、心解けたる御増の中にも入れ給はず。「思ひ知れ」とにや、此度の司召にも漏れぬれど、いとしも思ひ入れず。大將殿、斯う静かにておはするに、世ははかなき物と見えぬるを、況して道理と思し或し

て、常に参り通ひ給つ、學問をも、音楽をも諸共に爲給ふに、往時も物狂はしきまで競争し聞え給ひしを思し出でて、互に今もはかなき事に付けつ、さすがに競争し給へり。春秋の御讀經をば然るものにて、臨時にも、様々事どもを爲させ給ひなどして、また徒らに暇ありげなる博士ども召し集めて、詩作り韻寒きなどやうの、すさびわざどもをも爲など心を遣りて、宮仕をもをささ爲給はず、御心に任せて打遊びておはするを、世の中には煩はしき事ども、やうやう云ひ出づる人人有るべし。夏の雨長閑に降りて徒然なる頃、中將、然るべき集ども數多持たせて参り給へり。殿にも、文殿開けさせ給ひて、また開かぬ御厨子どもの、珍らしき古集の故無からぬ、少し選り出でさせ給ひて、其道の人人、わざとは有らねど、數多召したり。殿上人も大學のも、いと多う集ひて、左右に小間取に方分かせ給へり。賭物どもなど、いと二無くて競争し合へり。塞ぎもて行くままに、難き讀の文字どもいと多くて、名聲ある博士どもなどの惑ふ所所を、時時打述給ふ様、いと此上無き御才の程なり。「如何で斯うしも足ひ給ひけん。猶然るべきにて斯く、萬づの事、人には勝れ給へるなりけり」と愛で聞ゆ。遂に右負けにけり。二日ばかり有りて、中將負けわざし給へり。事事はら有らで、謎めきたる繪破子ども、賭物など様々に、今日も例の人人多く召して詩など作らせ給ふ。階の下の薔薇、氣色ばかり咲きて、春秋の花盛よりも薫やかにをかしき程なるに、打解け遊び給ふ。中將の御子の今年初めて殿上する、八つ九つばかりにて、聲いと面白く、笙の笛吹きなどするを、愛くしみ賞讃び給ふ。四の君腹の次郎なりけり。世の人の思へる信任重くて、覺え殊に愛護けり。心ばへも角角しう、容貌

もをかしくて、御音楽の少し亂れ行く程に、高砂を出だして歌ふ。いと愛くし。大将の君、御衣服きて被け給ふ。例よりは打亂れ給へる御顔の匂ひ似る物無く見ゆ。羅の直衣單衣を着給へるに、透き給へる肌附、況していみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど、遠く見奉りて涙落しつ居たり。「逢はましものを、小百合葉の」と歌ふ最後に、中將御土器参り給ふ。

其れもかと今朝開けたる初花に劣らぬ君が匂ひをぞ見る
微笑みて取り給ふ。

時ならで今朝咲く花は夏の雨に萎れにけらし匂ふ程無く

「我へにたるものを」と打騒動きて、らうがはしく聞し召し成すを、咎め出でつつ、強ひ聞え給ふ。多かめりし事どもも、斯様なる折の正確ならぬ事、數々に書き付くる、「心地無きわざ」とか、貫之が諫めたる方にて、煩かしければ止めつ。皆此御事を譽めたる筋にのみ、日本のも唐のも作り續けたり。我が御心地にも甚う思し願りて、「女王の手 武王の弟」と、打誦し給へる、御名告さへぞ、げにめでたき。成王の何とか述給はんとすらん、其ればかりや又心もとなからん。兵部卿宮も常に渡り給ひつつ、御音楽などもをかしろおはする宮なれば、今めかしき御關係どもなり。其頃尚侍の君退かて給へり。寢病に久しう憎み給ひて、禁厭なども心安くせんとてなりけり。修法なども始めて、隨り給ひぬれば、誰も誰も嬉しう思すに、例の「珍らしき隙なるを」と聞え交し給ひて、理無き様にて夜な夜な對面し給ふ。いと盛りに、眼は

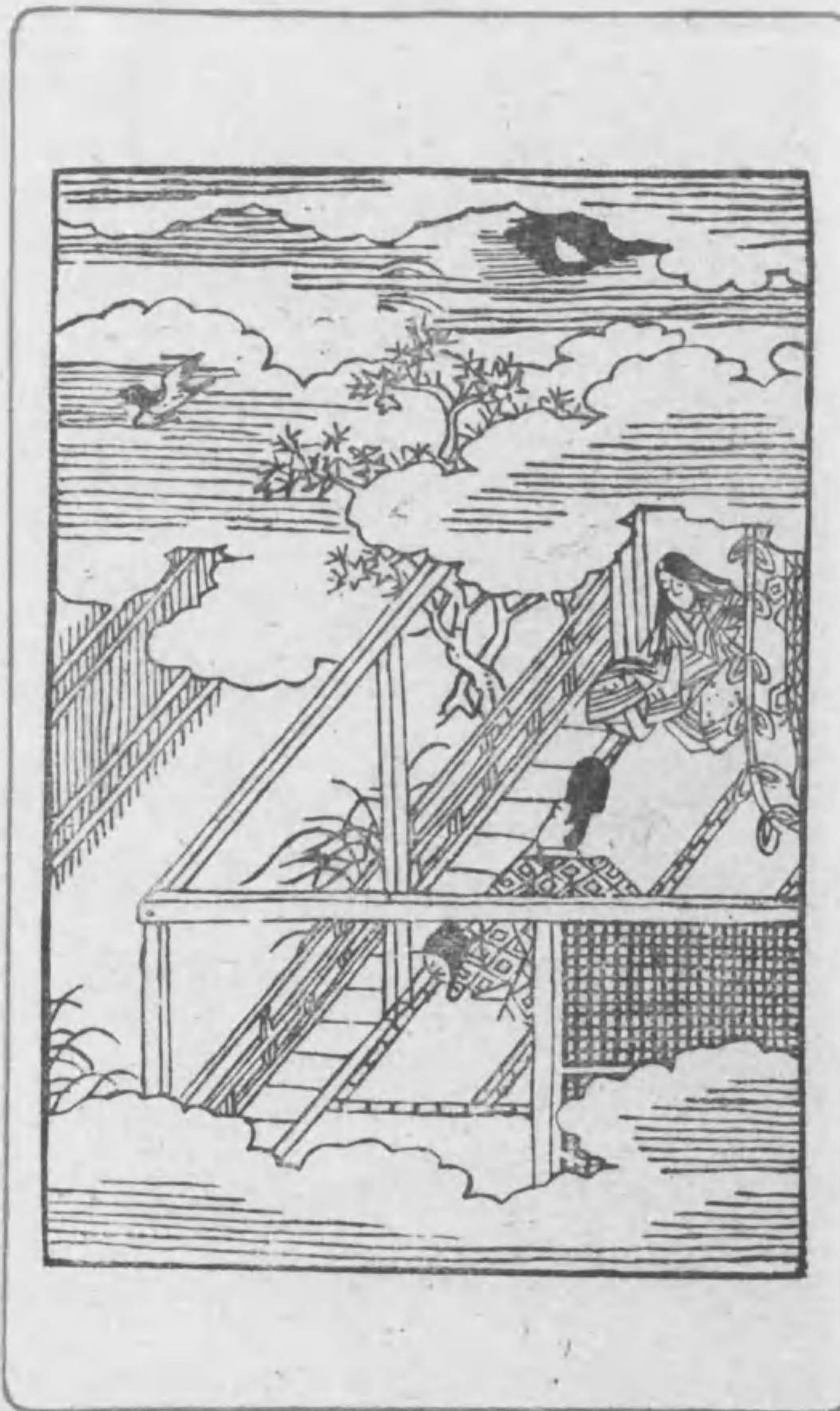
はしき氣はひし給へる人の、少し打惱みて、瘦瘦に成り給へる程、いとをかしげなり。後の宮も一所におはする頃なれば、氣は怖ろしけれど、斯かる事しも増さる御辯なれば、いと忍びて度重なり行けば、氣色見る人人も有るべかめれど、煩はしうて、宮には「然なん」とは啓せず。大臣はた思ひ掛け給はぬに、雨俄かにおどろおどろしう降りて、雷甚う鳴り騒ぐ曉に、殿の君達、宮司など立ち騒ぎて、此方彼方の人目繁く、女房どもも怖ぢ惑ひて、近う集ひ参るに、いと理無くて出で給はん方無くて、明け果てぬ。御帳の周圍にも、人人繁く並み居たれば、いと胸潰らはしく思さる。心知りの人二人ばかり心を感はず。雷鳴り止み、雨少し小止みぬる程に、大臣渡り給ひて、先づ宮の御方におはしけるを、村雨の紛れにて、え知り給はぬに、輕らかに這ひ入り給ひて、御腰引き上げ給ふまに、「如何にぞ、いと憂たて有りつる夜の様に、思ひ遣り聞えながら、参り來でなん。中將、宮の亮など侍ひつや」など、述給ふ氣はひの舌敏に翻本けきを、大將は物の紛れにも、左大臣の御有様、ふと思し比べられて、例しへ無うぞ微笑まれ給ふ。げに入り果てても述給へかした。尚侍の君いと花びしう思されて、やをら膝行り出で給ふに、面のいと赤みたるを、「猶惱ましう思さるるにや」と見給ひて、「何と御氣色の例ならぬ。物の氣などの煩かしきを、修法延べさすべかりけり」と述給ふに、薄二藍なる帯の、御衣に纏はれて、引き出でられたるを見附け給ひて、「怪し」と思すに、また疊紙の手習などしたる、御几帳の下に落ちたりけり。「是れは如何なる物どもぞ」と、御心驚かれて、「彼れけ誰れがぞ、氣色殊なる物の様かな、賜へ、其れ取りて誰れがぞと見侍らん」と述給

ふにぞ、打見返りて、我も見付け給へる。紛はずべき方も無ければ、如何がは答へ聞え給はん。我にも有らでおはするを、子ながらも「恥かしと思すらんかし」と、然ばかりの人は思し憚るべきぞかし。然れどいと急に、寛解めきたる所おはせぬ大殿の思しも廻さず成りて、疊紙を取り給ふまに、几帳より見入れ給へるに、いと甚う媚びて、憤ましからず添ひ臥したる男も有り。今ぞやをら顔引き隠して、とから紛らはず。あさましう、目覺ましう、心病ましけれど、直面には如何でか顯はし給はん。目も昏るる心地すれば、此の疊紙を取りて、寢殿に渡り給ひぬ。尙侍の君は自失の心地して、死ぬべく思さる。大將殿もいとほしう、「終に用無き振舞の積りて、人の非難を負はんとする事」と思せど、女君の心苦しき御氣色を、とかく慰め聞え給ふ。大臣は、思ひのままに體めたる所おはせぬ本性に、いとど老いの御氣色さへ添ひ給ひにたれば、何事にかは滞り給はん。ゆくゆくと宮にも愁へ聞え給ふ。「斯う斯うの事なん侍る。此の疊紙は右々將の御手なり。昔も心許されて、有り初めにける事なれど、人がらに萬づの罪を宥して、然ても見んよひ侍りし折は、心も留めず、目覺ましげにもてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、然るべきにこそはとて、世に穢れたりとも、思し棄つまじきを頼みにて、斯く本意の如く奉りながら、猶其の懼り有りて、專向りたる女御「原本房トアリ。不御」なども、云はせ侍らぬをだに、飽かず口惜しう思ふ給ふるに、また斯かる事さへ侍りければ、更にいと心憂くなん思ひ成り侍りぬる。男の例とは云ひながら、大將もいと怪しからぬ御心なりけり。齋院をも猶聞え使しつづ、忍びに御文通はしなどして、氣色ある事と人の語り侍り

しをも、世の爲めのみにあらず、我が爲めも善かるまじき事なれば、餘も然る思ひ遣り無きわざ爲出でられじとなん、時の有職と、天の下を靡かし給へる様殊なめれば、大將の御心を疑ひ侍らざりつる」など述給ふに、宮はいとどしき御心なれば、いと物憂しき御氣色にて、「帝と聞ゆれど、昔より皆人思ひ恥し聞えて、致仕の大臣も、又無く敬仕く一つ女を、兄の坊にておはするには奉らで、弟の源氏にて幼きが元服の添臥に取り分き、また此君をも宮仕にと志して侍りしに、江蕨がましかりし有様なりしを、誰れも誰れも怪しと思したりし。皆彼の御方こそ御心寄せ侍るめりしを、其本意違ふ様にてこそは、斯くも侍ひ給ふめれど、いとほしさに、如何で然る方にてても、人に劣らぬ様にもてなし聞えん。然ばかり妬げなりし人の、見る所も有りなどこそと思ひ侍りつれど、強ひて我心の入る方に靡き給ふにこそは侍らめ。齋院の御事は況して然も有らん。何事に付けても、朝廷の御方に後ろ安からず見ゆるは、春宮の御代心寄せ異なる人なれば、道理になん有める」と、直直しう述給ひ續くるに、さすがにいとほしう、「何と聞えつる事ぞ」と思さるれば、「然ばれ、暫し此事漏し侍らじ、内にも奏せさせ給ふな。斯くの如罪侍るとも、思し捨つまじきを頼みにて、甘えて侍るなるべし。内内に制し述給はんは、聞き侍らずは、其罪には自ら當り侍らん」など聞え直し給へど、殊に御氣色も直らず。斯く一所におはして隙も無きに、「憤む所無く、さて入り物せらるらんは、殊更に輕め弄せらるるにこそは」と思し成すに、いとどいみじう目覺ましう、「此序に然るべき事ども構へ出でんに好き便りなり」と思し廻らすべし。

花散里

人知れの御心づからの物思はしさは、何時と無き事なめれど、斯く大方の世に付けてさへ、煩はしう思し
 亂るる事のみ増されば、物心細く、世の中なべて厭はしう思し成らるるに、さすがなる事多かり。麗景殿
 と聞えしは、宮達もおはせず、院隠れさせ給ひて後、いよいよ哀れなる御有様を、唯だ此大將殿の御心に
 持て隠されて過ぐし給ふなるべし。御弟の三の君、内裏邊りにて、はかなう仄めき給ひし名残、例の御心
 なれば、さすがに忘れも果て給はず。わざとをもてなし給はぬに、人の御心をのみ盡し果て給ふべかめる
 をも、此頃残る事無く思し亂るる世の哀れの種はひには思ひ出で給ふに、忍び難くて、五月雨の空、珍らし
 う晴れたる雲間に渡り給ふ。何ばかりの御装無く、打簀し、御前なども無く、忍びて、中川の程おはし過
 ぐるに、小小やかなる家の木立など、由はめるに、善く鳴る琴を東に調べてかき合せ、厭はしう弾き成す
 なり。御耳留まりて、門近なる所なれば、少し差し出でて見入れ給へば、大きな桂の木の追風に、祭の頃
 思し出でられて、そこはかと無く氣はひをかきき、一唯だ一目見給ひし宿りなり」と見給ふ。尋常ならず
 程程にけるを、おぼめかしくやと憤ましけれど、過ぎ難てに休らひ給ふ。折しも杜鵑鳴きて渡る。催し聞
 え置なれば、御車推し返させて、例の惟光「匣をアリ」入れ給ふ。



をち返りえぞ忍ばれぬほととぎす微語らひし宿の垣根に
寢殿と思しき屋の、西の端に人人居たり。前も聞きし降なれば、降作り、氣色取りて、御消息聞ゆ。若や
かなる氣色どもして、おぼめくなるべし。

ほととぎす語らふ聲は其れなれどあなおぼつかな五月雨の空

殊更に迫ると見れば、「好し、好し、種系し垣根も」とて出づるを、人知れぬ心には、妬うも哀れにも思ひ
けり。然も憤むべき事ぞかし。道理にも有れば、さすがなり。斯様の時に、「筑紫の五節が、らうたげなり
しはや」と、先づ思し出づ。如何なるに付けても、御心の暇無く、苦しげなり。年月を経ても猶斯様に見し
邊り、情過ぐし給はぬにしも、なかなか數多の人の物思ひ種なり。彼の本意の所は、思し遣りつるも著く、
人目無く静かにて、おはする有様を見給ふも、いと哀れなり。先づ女御「原本房トアリ、円御」の御方にて、
昔の御物語など聞え給ふに、夜更けにけり。二十日の月射し出づる程に、いと木高き蔭ども、木間う見え
渡りて、近き橋の蔭りなつかしく匂ひて、女御の御氣はひ成熱にたれど、飽くまで用意ありて、貴にらう
たげなり。「勝れて華やかなる御覽えこそ無かりしかど、唯まじうなつかしき方には、思したりしものを」
など、思ひ出で聞え給ふに付けても、昔の事かき列ね思されて、打泣き給ふ。郭公、有りつる垣根のにや、
同じ聲に打鳴く。「慕ひ來にけるよ」と思さるる程も、驚なりかし。「如何に知りてか」など、忍びやかに
打語し給ふ。

橋の香をなつかしき郭公花散る里を尋ねてぞ訪ふ

「往時の忘れ難き「円御」思ひ給へらる「円御アリ」慰めには、先づ参り侍りのべかりけり。此上無うこそ
紛るる事も、數添ふ事も侍りけれ。大方の世に従ふものなれば、昔語もかき崩すべき人少なう成り行く
を、況して如何に徒然も紛れ無く思さるらん」と聞え給ふに、いと更なる世なれど、物をいと哀れに思し續
けたる御氣色の淺からぬも、人の御様からにや、多く哀れぞ添ひにける。

人目無く荒れたる宿はたちばなの花こそ軒のつまと成りけれ

とばかり述給へるも、「然は云へど、人にはいと異なりけり」と思し比べらる。西面には、わざと無く、忍
びやかに打振舞ひ給ひて、覗き給へるも珍らしきに添へて、世に目慣れの御様なれば、辛さも忘れぬべし。
何やかやと、例のなつかしく語らひ給ふも、思さぬ事には有らざるべし。假にも見給ふ限りは、尋常の際
には有らねばにや、棟樑に付けて、「云ふ甲斐無し」と思さるるは無ければにや、憎げ無く、我も人も情を
交はしつづ過ぐし給ふなりけり。其れを「あいなし」と思ふ人は、とかくに變るも、「道理なる世の性」と
思ひ成し給ふ。有りつる垣根も然様にて、有様變りにたる邊りなりけり。

須磨

世の中いと煩はしく、はしたなき事のみ増されば、強めて知らず亂に有り経ても、「是れより増さる事もや」と思し成りぬ。彼の須磨は「昔こそ人の住處なども有りけれ、今はいと里離れ心渡くて、海人の家だに稀れに」なんと聞き給へど、人繁く遠慮たらん住居は、いと本意無かるべし。然りとて都を遠ざからんも、故里覺束なかるべきを、人悪くぞ思し亂るる。萬づの事、來し方、行末思ひ續け給ふに、悲しき事いと様様なり。憂きものと思ひ捨てつる世も、「今は」と住み離れなん事を思すには、いと捨て難き事多かる中にも、姫君の明暮に添へて、思ひ歎き給へる様の心苦しう、哀れなるを、行き廻りても、また逢ひ見ん事を必ずと思さんにてだに、猶一二日の程、外外に明し暮す折折だに、覺束なきものに覺え、女君も心細うのみ思ひ給へるを、幾年其程と限り有る道にも有らず。逢ふを限りに隔たり行かんも、定め無き世に、「やがて別るべき門田にもや」と、いみじく覺え給へば、「忍びて諸共にもや」と思し寄る折あれど、「然る心細からん海面の、波風より外に、立ち交る人も無からんに、斯くらうたき御様にて、引き具し給へらんもいと調和無く、我心にもなかなか物思ひのつまなるべきを」など思し返すた、女君は、「いみじからん道にも、後れ聞えずだに有らば」と面向け、恨めしげに思したり。彼の花散里にも、おはし通ふ事こそ稀なれ、心細く哀れなる御有様を、此の御蔭に隠れて物し給へば、思し歎きたる様、いと道理なり。等閑にても、仄かに見奉り通ひ給ひし所、人知れぬ心を碎き給ふ人多かりける。入道の宮よりも、「物の聞えや又如何が取り成されん」と、我が御爲め憤ましけれど、忍びつつ御訪らひ常に有り。「昔斯様に相思し、哀れをも見せ給

はましかば」と、打思ひ出で給ふに、「然も様様に心をのみ盡すべかりける人の御契りかな」と、辛う思ひ聞え給ふ。三月廿日餘りの程になん都離れ給ひける。人に今としも知らせ給はず。唯だいと近う仕まつり馴れたる限り七八人ばかり御供にて、いと微かにて出で立ち給ふ。然るべき所所に御文ばかり打忍び給ひしにも、哀れと忍ばるばかり書い給へるは、見所も有りぬべかりしかど、其折の心地の紛れに、はかばかしうも聞き置かず成りにけり。二三日豫て、世に隠れて大殿に渡り給へり。綱代の車の打變れたるにて「無シ」女車のやうにて隠ろへ入り給ふも、いと哀れに夢とのみ見ゆ。御方いと寂しげに打荒れたる心地して、若君の御乳母ども、昔侍ひし人の中に、退かて散らぬ限り、斯く渡り給へるを珍らしがり聞えて、参り上り集ひて、見奉るに付けても、殊に物深からぬ若き人人さへ、世の常無き思ひ知られて、涙に昏れたり。若君はいと美しくして、戯れ走りおはしたり。「久しき程に忘れぬこそ哀れなれ」とて、膝に居を給へる、御氣色忍び難けなり。大臣此方に渡り給ひて、對面し給へり。「徒然に罷らせ給へらん程、何と侍らぬ昔物語も参り来て聞えさせんと思ひ給ふれど、身の病重きに由り、朝廷にも仕うまつらず、位をも返し奉りて侍るに、私さまには腰伸べてなど、物の聞え僻僻しかるべきを、今は世の中憚るべきにも侍らねど、逸草き世のいと怖ろしう侍るなり。斯かる御事を見給ふるに付けて、命長きはいと心憂く思ひ給へらるる世の末にも侍るかな。天の下を逆様に成しても、思ひ給へ寄らざりし御有様を見給ふれば、萬づいとあぢきなくなん」と聞え給ひて、甚う萎垂れ給ふ。「と有る事も、斯かる事も、前の世の報いにこそ侍るな

れば、云ひもて行けば、唯だ自らの憫息になん侍る。然して斯く官爵を取られ「原本かトアリ。因ニ由リテ訂正ス」ず、淺薄なる事に關らひてだに、朝廷の畏まりなる人の、現實様にて世の中に有り經るは、咎重きわざに他の國にも爲侍るなるを、遠く放ち遣はすべき定めなども侍るなるは、殊なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁り無き心に任せて、冷然く過ぐし侍らんも、いと儼り多く、是れより大なる恥に臨まぬ前に、世を遣れなんと思ふ給へ立ちぬる」など、細やかに聞え給ふ。昔の御物語、院の御事、思し述給はせし御心ばへなど聞え出で給ひて、御直衣の袖も引き放ち給はぬに、君もえ心強くもてなし給はず。若君の何心無く紛れ歩りきて、是れ彼れに馴れ聞え給ふを「いみじ」と思ひたり。「過ぎ侍りにし人を、世に思ふ給へ忘るる世無くのみ今に悲び侍るを、此の御事になん、若し侍る世ならましかば、如何やうに思ひ歎き侍らまし。好くぞ短くて、斯かる夢を見ず成りにけると、思ふ給へ慰め侍る。幼く物し給ふが、斯く踏過ぎぬる中に留まり給ひて、親昵さひ聞えぬ月日や隔たり給はんと、思ひ給ふるをなん、萬づの事よりも悲しう侍る。往時の人も眞に犯罪あるにても、斯かる事に當らざりけり。猶然るべきにて、他の朝廷にも斯かる類ひ多く侍りけり。然れど云ひ出づる節ありてこそ然る事も侍りけれ。と標斯く様に思ひ給ひ寄らん方無くなん」など、多くの御物語聞え給ふ。三位中將も参り合ひ給ひて、御酒など参り給ふに、夜更けぬれば、泊り給ひて、人人御前に侍はせ給ひて、物語など爲させ給ふ。人よりは此上無う忍び思す中納言の君、云へばえに悲しう思へる様を、人知れず「哀れ」と思す。人皆静まりぬるに、取り分きて語らひ給ふ。

是れに由り留まり給へるなるべし。明けぬれば、夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやうやう盛り過ぎて、僅かなる木陰のいと白き庭に、薄く霧渡りたる、そこはかと無く霞み合ひて、秋の夜の哀れに多く立ち勝れり。隅の勾欄に押し掛かりて、とばかり眺め給ふ。中納言の君見奉り送らんとにや、妻戸押し開けて居たり。「また對面あらん事こそ思へばいと難けれ。斯かりける世を知らで、心安くも有りぬべかりし月頃を、然しも急がで隔てけるよ」など述給へば、物も聞えず泣く。若君の御乳母宰相の君して、宮の御前より御消息聞え給へり。「自らも聞えまほしきを、かき昏らす亂り心地躊躇ひ侍る程に、いと夜深う出でさせ給ふなるも、様異りたる心地のみし侍るかな。心苦しき人の寢きたなき程は、暫しも休らはせ給はで」と聞え給へれば、打泣き給ひて、

鳥部山燃えし煙も紛ふやと海人の鹽焼く浦見にぞ行く

御返しとも無く打誦し給ひて、「曉の別れは、斯うのみや心盡しなる。思ひ知り給へる人も有らんかし」と述給へば、「何時と無く別れと云ふ文字こそ憂たて侍るなる中にも、今朝は猶類ひ有るまじう思へ給へらる程かな」と、鼻聲にて、げに淺からず思へり。「聞えさせまほしき事も、返す返す思ひ給へながら、唯だに結ばはれ侍る程、推し量らせ給へ。寢きたなき人は、見給へんに付けても、なかなか憂き世道九難う思ひ給へられぬべければ、心強く思ふ給へ成して、急ぎ退かて侍り」と聞え給ふ。出で給ふ程を、人人覗きて見奉る。入方の月いと明きに、いとと驚めかしう清らにて、物を思いたる様、虎狼だに泣きぬべし。況して幼

御なくおはせし程より、見奉り初めてし人人なれば、譬しへ無き御有様を「いみじ」と思ふ。眞や、御返り、亡き人の別れやいと隔つらん煙と成りし雲居ならでは

取り添へて哀れのみ盡きせず、出で給ひぬる名残、忌忌しきまで泣き合へり。殿におはしたれば、我が御方の人人も睡眠まさりける氣色にて、所所に群れ居て、「あさまし」とのみ世を思へる氣色なり。侍には、親しう仕うまつる限りは、御供に參るべき心設けて、「以下一行原本ニ誤植アリ、団ニ由リテ訂正ス」私の別れ惜む程にや、人目も無し。然らぬ人は、訪らひ參るも重き咎め有り。煩はしき事増されば所狭く集ひし馬、車の痕跡も無く寂しきに、「世は憂き物なりけり」と思し知らる。豪殿なども傍は塵ばみて、疊所所ひき返したり。「見る程だに斯かり、況して如何に荒れ行かん」と思す。西の對に渡り給へれば、御格子も參らで眺め明し給ひければ、寶子などに若き童部、所所に臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直委どもをかしく、出で入るを見給ふにも、心細く、「年月経ば斯かる人人も、えしも有り果てでや行き散らん」など、然しも有るまじき事さへ、御目のみ留まりける。「昨夜は然か然かして夜更けにしかばなん。例の思はずなる様にも思し成しつる。斯くて侍る程だに、御目離れずと思ふを、斯く世を離るる際には、心苦しき事の自か多かりけるを、直屋隠りにてやは。常無き世に人も情無きものと、心置かれ果てんと、いとほしくてなん」など聞え給へば、「斯かる世を見るより外に思はずなる事は何事にか」とばかり述給ひて、「いみじ」と思し入りたる様、人より殊なるを「もろ行カ」道理ぞかし。父親王いと疎かに、固より思し付きに



けるに、況して世の聞えを煩はしがりて、音づれ聞え給はず。御訪らひにだに渡り給はぬを、人の見るらん事も耻かしう、なかなか知られ奉らで止みなましを、櫻母の北の方などの、「俄かなりし幸ひの慌ただしさ、あな忌忌しや。思ふ人、かたがだに付けて、別れ給ふ人かな」と述給ひけるを、然る便り有りて、漏り聞き給ふにも、いみじう心苦しければ、是れよりも絶えて音づれ聞え給はず。また頼もしき人も無く、げにぞ哀れなる御有様なる。「猶世に恕され難うて年月を經ば、歳の中にも迎へ奉らん。只今は人聞きのと調和無かるべきなり。朝廷に畏まり聞ゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身を振舞ふ事も、いと罪重かなり。過ち無けれど、然るべきにこそ斯かる事も有めれと思ふに、況して思ふ人具するは、例無き事なるを、直面向に物狂ほしき世にて、立ち増さる事も有りなん」など聞え知らせ給ふ。日闇くるまで大駈罷れり。帥の宮、三位中將などおはしたり。對面し給はんとて、御直衣など奉る。位無き人はとて、無紋の御直衣、なかなかいとつかしきを着給ひて、打裏れ給へる、いとめでたし。御髪掻き給ふとて、鏡臺に寄り給へるに、面捜せ給へる影の、我ながらいと貴に清らなれば、「此上無うこそ我へにけれ。此影の様にや瘦せて侍る。哀れなるわざかな」と述給へば、女君、涙を一目浮けて見おこせ給へる、いと忍び難し。

身は斯くて漂流らへぬとも君が過り然らぬ鏡の影は離れじと聞え給へば、

別れても影だに留まるものならば鏡を見ても慰めてまし

〔四〕云ふとも無くてノ句アリ」柱隠れに居隠れて、涙を粉らはし給へる様、「猶許多見る中に類ひ無かりけり」と、思し知らるる人の御有様なり。親王は哀れなる御物語聞え給ひて、暮るる程に還り給ひぬ。花散里の心細げに思して、常に聞え給ふも道理にて、「彼の人も、今一度見ずは、冷淡しと思はん」と思せば、其夜はまた出で給ふものから、いと物憂くて、甚う更かしておはしたれば、女御、「斯く數まへ給ひて、立ち寄せ給へる事」と、喜び聞え給ふ様、書き續けんも煩さし。いとみじう心細き御有様、唯だ此の御蔭に隠されて、過ぐい給へる年月、いとど荒れ増さん程思し遣られて、殿の中いと幽かなり。月籠ろに射し出でて、池廣く山木深き邊り、心細げに見ゆるにも、住み離れたらん殿の中思し遣らる。西面には、斯うしも渡り給はずやと、打屈して思しけるに、哀れ添へたる月影の、艶めかしう蕭やかなるに、打振舞ひ給へる白ひ、似る物無くて、いと忍びやかに入り給へれば、少し膝行り出でて、やがて月を見ておはす。また此處に御物語の程に、明方近う成りにけり。「短夜の程や。斯ばかりの對面も又はえしもやと思ふこそ、事無しにて過ぐしつる年頃も悔しう、來し方、行く先の例に成りぬべき身にて、何と無く心の留まる世無くこそ有りけれ」と、過ぎにし方の事ども述給ひて、鳥も囀鳴けば、世に憤みて急ぎ出で給ふ。例の月の入り果つる程、比へられて哀れなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、

月影の宿れる袖は狭くとも留めても見ばや飽かぬ光を

「いみじ」と思いたるが、心苦しければ、且つは慰め聞え給ふ。

行き廻り終に澄むべき月影の暫し曇らん空な眺めそ

「思へばはかなしや。唯だ知らぬ涙のみこそ心を昏らすものなれ」など述給ひて、明暗の程に出で給ひぬ。萬づの事ども準備めさせ給ふ。親しう仕うまつり、世に隨かぬ限りの人々、殿の事取り行ふべき上下定め置かせ給ふ。御供に従ひ聞ゆる限りは、また選り出で給へり。彼の山里の御住處の具は、え然らず取り使ひ給ふべき物ども、殊更に装ひも無く事削ぎて、また然るべき書ども文集など入りたる箱、さては琴一つぞ持たせ給ふ。所狭き御調度、華やかなる御装ひなど更に具し給はず。卑しの山麓めきてもてなし給ふ。侍ふ人より初め、萬づの事、皆西の對に聞え渡し給ふ。領し給ふ御庄、御牧より初めて、然るべき所所の券など、皆奉り置き給ふ。其れより外の御殿町、納殿など云ふ事まで、少納言を、はかばかしき者に見置き給へれば、親しき家司ども具して、知ろしめすべき様ども述給ひ預く。我が御方の中務、中將などやうの人々、冷然き御もてなしながら、「見奉る程こそ慰めつれ、何事に付けてか」と思へども、「命有りて此世に又歸るやうも有らんを、待ち附けんと思はん人は、此方に侍へ」と述給ひて、上下皆參り上らせ給ひて、「然るべき物ども、品品配らせ給ふノ句アリ」若君の御乳母達、花散里などにも、をかき様のは然る物にて、眞實眞實しき筋に思し寄らぬこと無し。尙侍の御許に、理無くして聞え給ふ。「問はせ給はぬも道理に思ひ給へながら、今はと世を思ひ果つる程の、憂さも辛さも類ひ無き事にてこそ侍りけれ。

逢瀬無き涙の河に沈みしや流るる水脈の初めなりけん

と思ひ給ふるのみなん、罪遁れ難う侍りける。」道の程も危ければ、細かには聞え給はず。女といみじう覺え給ひて、忍び給へど、御袖より餘るも所狭うなん。

なみだ河浮ぶ水沫も消えぬべし流れて後の瀬をも待たずて

泣く泣く亂れ書き給へる御手、いとをかしげなり。「今一度對面無くてや」と思はずは、猶口惜しけれど、思し返して、「憂し」と思し成すゆかり多くて、睡ろげならず忍び給へば、いとあながちにも聞え給はず成りぬ。明日との暮には、院の御草拜み奉り給ふとて、北山へ參うで給ふ。曉かけて月出づる頃なれば、先づ入道の宮に參うで給ふ。近き御簾の前に御座參りて、御自ら聞えさせ給ふ。春宮の御事を、いと關心たきものに思ひ聞え給ふ。互に心深きどちの御物語は、萬づの哀れ増さりけんかし。なつかしう、めでたき御氣はひの、昔に變らぬに、冷淡かりし御心ばへも微觸め聞えさせまほしけれど、今更に憂たてと思さるべし。我が御心にも、なかなか今一際亂れ増さりぬべければ、念し返して、「唯だ斯く思ひ掛けぬ罪に當り侍るも、思ひ給へ合はする事の一節になん、空も怖しう侍る。惜しげ無き身は無きに成しても、宮の御世だに事無くおはしませば」とのみ聞え給ふぞ道理なるや。宮も皆思し知らるる事にし有れば、御心のみ動きて聞え遣り給はず。大將、萬づの事かき集め思し續けて、泣き給へる氣色、いと盡きせず艶めきたり。「御山陵に參り侍るを、御傳言や」と聞え給ふに、頼に物も聞え給はず。理無く躑躅ひ給ふ御氣色なり。

見しは無く有るは悲しき世の果てを背きし効も泣く泣くぞ經る
いみじき御心感ひどもに、思し集むる事ども、えぞ續けさせ給はぬ。

別れしに悲しき事は盡きにしを又ぞ此世の憂さは増される
月待ち出でて出で給ふ。御供に唯だ五六人ばかり、下人も陸じき限りして、御馬にてぞおはする。更なる事
なれど、有りし世の御遊行に異なり。皆いと悲しう思ふ中に、御殿の日、假の御隨身にて仕うまつりし右近
の祓の藏人、得べき位階も程過ぎつるを、終に御簡削られて、官も取られて、はしたなければ、御供に參る
中なり。賀茂の下の御社を彼れと見渡す程、ふと思ひ出でられて、下りて御馬の口を取る。

引き連れて葵挿しし住時を思へば辛し賀茂の環垣
と云ふを、「げに如何に思ふらん。人より願に華やかなりしものを」と思すも心苦し。君も、御馬より下り
給ひて、御社の方を拜み給ふとて、神に罷り申し給ふ。

憂き世をば今ぞ別るる留まらん名をば糺の神に任せて
と述給ふ様、物愛でする若き人にて、身に染めて「哀れにめでたし」と見奉る。御山陵に參うで給ひて、お
はしましし御有様、唯だ目の前のやうに思し出でらる。限り無きにても、世に無く成りぬる人ぞ、云はん方
無く口惜しきわざなりける。萬づの事を泣く泣く申し給ひても、其の道理を顯露にえ承り給はねば、然ば
かり思し述給はせし様様の御遺言は、何方へか消え失せにけんと、云ふ甲斐無し。御墓は道の草繁く成り

て、分け入り給ふ程、いと露けきに、月も雲隠れて、森の木立木深く心涼し。歸り出でん方も無き心
地して、拜み給ふに、有りし御面影明亮に見え給へる、漫ろ寒き程なり。

亡き影や如何が見るらん比へつつ眺むる月も雲隠れぬる
明け果つる程に歸り給ひて、春宮にも御消息聞え給ふ。王命婦を御代りとして侍はせ給へば、其局にして、
「今日なん都離れ侍る。又參り侍らず成りぬなん數多の憂へに勝りて思ひ給へられ侍る。萬づ推し量りて啓
し給へ。」

何時かまた春の都の花を見ん時失へる山陵にして
櫻の散り過ぎたる枝に附け給へり。「斯くなん」と御覽せさせれば、幼き御心地にも、眞實だちておはしま
す。「御返し如何が物し侍らん」と啓すれば、「暫し見ぬだに戀しきものを、遠くは況して如何にと云へかし」と
と述給はす。「物はかなの御返りや」と、哀れに見奉る。あぢきなき事に御心を碎き給ひし昔の事、折折の
御有様、思ひ續けらるるにも、物思ひ無くて、我も人も過い給ふべかりける世を、心と思し歎きけるを、悔
しう、我心一つに掛からん事のやうにぞ覺ゆる。御返りは、「更に聞えさせ遣り侍らず。御前には啓し侍り
ぬ。心細げに思召したる御氣色もいみじうなん」と、そこはかと無く心の亂れけるなるべし。

咲きて疾く散るは憂けれど行く春は花の都を立ち歸り見よ
「時し有らば」とのみ聞えて、名残も哀れなる物語を爲つつ、一宮の内、忍びて泣き合へり。一目も見奉る

人は、斯く思ひ留はれぬる御有縁を歎き惜み聞えぬ人無し。況して常に参り馴れたりしは、知り及び給ふまじき長女、御前人までも、有り難き御願みの下なりつるを、「暫しにても見奉らぬ程や頼ん」と思ひ歎きたり。大方の世の人も、誰かは宜しく思ひ聞えん。七つに成り給ひしより以來、帝の御前に晝夜侍ひ給ひて、奏し給ふ事の成らぬは無かりしかば、此の御勞りに掛からぬ人無く、御徳を喜ばぬやは有りし。やんごとなき上達部、辨官などの中にも多かり。其れより下は數知らぬを、思ひ知らぬには有らねど、差し當りては、進草き世を思ひ憚りて、参り寄る人も無し。世揺動りて惜み聞え、下には朝廷を誘り恨み奉れど、「身を捨てて訪らひ参らんにも、何の甲斐かは」と思ふにや、斯かる折は人悪ろく、怨めしき人多く、「世の中はあぢきなきものかな」とのみ、萬づに付けて思す。其日は女君に御物語長閑に聞え暮し給ひて、例の夜深く出で給ふ。假の御衣など、旅の御装ひ甚く憂し給ひて、「月出でにけりな、猶少し出でて見だに送り給へかし。如何に聞ゆべき事多く積りにけりとのみ覺えんとすらん。」一日二日たまさかに隔つる折だに、怪しう恠せき心地するものを」とて、御簾捲き上げて、端の方に誘ひ聞え給へば、女君泣き沈み給へる、躊躇ひて、壁行り出で給へる、月影に、いみじうをかしげにて居給へり。「我身斯くてはかなき世を別れなば、如何なる様に鬮寄ひ給はん」と、鬮心たく悲しけれど、思し入りたるに、太甚しかるべければ、生ける世の別れを知らで契りつつ命を人に限りけるかな。「はかなし」など、淺薄に聞え成し給へば、

惜からぬ命に代へて目の前の別れを暫し止めてしがな

「げに然ぞ思さるらん」と、いと見捨て難けれど、明け果てなば、はしたなかるべきに由り、急ぎ出で給ひぬ。道すがら面影につと添ひて、胸も寒がりながら、御船に乗り給ひぬ。日長き頃なれば、追風さへ添ひて、また申の刻ばかりに、彼の浦に着き給ひぬ。假初の道にても、斯かる旅を慣らひ給はぬ心地に、心細さも、をかしさも珍らかなり。大江殿と云ひける所は、甚う荒れて、松ばかりぞ標なりける。

唐國に名を残しける人よりも行方知られぬ家居をや爲ん

渚に寄る波の目つ返るを見給ひて、「羨ましくも」と打誦んじ給へる、然る世の故事なれど、珍らしく聞き成され、「悲し」とのみ鬮供の人人思へり。打願み給へるに、來し方の山は霞霧かにて、眞に「三千里の外」の心地するに、樹の葉も堪へ難し。

故里を峰の霞は隔つれど眺むる空は同じ雲居か

辛からぬもの無くなん。おはすべき所は、行平の中納言の、雲汐垂れつつ侘びける家居近き邊りなりけり。海面は稍入りて、哀れに心荒涼げなる山中なり。垣の標より初めて珍らかに見給ふ。茅屋ども葦葺ける鹿めく屋など、をかしう装飾ひ成したり。所に付けたる御住居、様異りて、「斯かる折ならずは、をかしうも有りなまし」と、昔の御心のすさび思し出づる。近き所、所の御庄の司召して、然るべき事どもなど、良清の朝臣など、親しき家司にて、仰せ行ふも哀れなり。時の間にいと見所ありて爲なさせ給ふ。水深う遣り成し、

桐木どもなど爲て、「今は」と静まり給ふ心地現實ならず。國の守も親しき殿人なれば、忍びて心寄せ仕うまつる。斯かる旅所とも無く、人騒がしけれども、はかばかしう物をも逃給ひ合はずべき人も無ければ、知らぬ國の心地して、いと埋れ甚く、「如何で年月を過ぐさまし」と思し遣らる。やうやう事静まり行くに、長雨の頃に成りて、京の事ども思し遣らるるに、戀しき人多く、女君の思したりし様、春宮の御事、若君の何心無く紛れ給ひしなどを初め、此處彼處思ひ遣り聞え給ふ。京へ人出だし立て給ふ。二條院へ奉れ給ふと、入道の宮のとは、書きも遣り給はず、暗され給へり。宮には、

松島の海人の苦屋も如何ならん須磨の浦人潮垂るる頃

「何時と侍らぬ中にも、來し方、行く先かき昏らし、汀増さりてなん。」尙侍の御許に、例の中納言の君の私事の様に、中なるに、「徒然と、過ぎにし方の思ひ給へ出でらるるに付けても、」

意りずまの浦の海松海布もゆかしきを懸焼く海人や如何が思はん

標様書き盡し給ふ言の葉、思ひ遣るべし。大殿にも、宰相の乳母にも、仕うまつるべき事なども書き遣はず。京にも、此の御文、所所に見給ひつつ、御心亂れ給ふ人人のみ多かり。二條院の君は、其ままたに起きも上がり給はず、盡きせぬ様に思し焦るれば、侍ふ人人も慰籍へ佗びつつ、心細う思ひ合へり。持て慣らし給ひし御調度ども、弾き鳴らし給ひし御琴、脱ぎ捨て給へる御衣の匂ひなどに付けても、今はと世に無からん人の様にのみ思したれば、且つはゆゆしうて、少納言は、僧都に御祈禱の事など聞ゆ。二方に御修法など

爲させ給ふ。且つは「斯く思し歎く御心を静め給ひて、思ひ無き世に有らせ奉り給へ」と、心苦しきままに祈り申し給ふ。旅の宿直物など調じて奉り給ふ。縁の御直衣、指貫、標異りたる心地するもいみじきに、「去らぬ鏡」と逃給ひし面影の、げに身に添ひ給へるも申斐無し。出で入り給ひし方、寄り居給ひし眞木柱などを見給ふにも、胸のみ塞がりて、物をとかう思ひ廻らし、世に汐じみぬる船の人だに有り。況して馴れ睦れ聞え、父母にも成りて生し立て習はし給へれば、戀しく思ひ聞え給へる、道理なり。ひたすら世に無くなりなんは、云はん方無くて、やうやう忘草も生ひやすらん。聞く程は近けれど、何時までと限り有る御別れにも有らで、思すに盡きせずなん。入道の宮にも、春宮の御事に由り、思し歎く様、いと更なり。御宿世の程を思すには、如何が淺くは思されん。年頃は唯だ物の聞えなどの愼ましきに、少し情ある氣色見せば、其れに付けて人の咎め出づる事もこそとのみ、偏に思し忍びつつ、哀れをも多う御覺じ過ぐし、直直しうもてなし給ひしを、「斯ばかりに、憂き世の人言なれど、掛けても此方には云ひ出づる事無くて止みぬるばかりの、人の御意向も、あながちなりし心の引く方に任せず、且つは目易く持て隠しつるぞかし」と、哀れに戀しうも如何が思し出でざらん。御返りも少し細やかに、「此頃はいとど、」

潮垂るる事を焼くにて松島に年經る海人も歎きをぞ積む

尙侍の君の御返りには、

浦に焚く數多に祝ひ戀なれば煙ゆる煙上行く方ぞ無き

「更なる事どもは、えなん」とばかり、聊かにて、中納言の君の中に有り。思し歎く様など、いみじく云ひたり。哀れと思ひ聞え給ふ節節も有れば、打泣かれ給ひぬ。姫君の御文は、心殊に細やかにし御返りなれば、哀れなる言多くて、

浦人の潮波む袖に比べ見上浪路隔つる夜の衣を

物の色し給へる様など、いと清らなり。何事もらうらうしう物し給ふを、「思ふ様にて、今は殊に原本ことトアリ、因ニ由リテ訂正ス」に心憐ただしう、行き聞らふ方も無く、齟やかにて有るべきものを」と思ふに、いみじう、口惜しう、夜晝面影に覺えて、堪へ難う思ひ出でられ給へば、「猶忍びてや迎へまし」と思す。また打返し、「何ぞや斯く憂き世に罪をだに失はん」と思せば、やがて御精進にて、明暮行ひておはす。大殿の、若君の御事など有るにも、いと悲しけれど、「自ら逢ひ見てん。頼もしき人ハ」原本にトアリ因ニ由リテ訂正ス」物し給へば、關心たうも有らず」と思し成さるるは、なかなか子の道の惑はれぬにや有らん。眞や、騒がしかりし程の紛れに漏してけり。彼の伊勢の宮へも御使ありけり。彼れよりも、ふりはへ尋ね参れり。浅からぬ事ども書き給へり。言の葉、筆遣ひなどは、人より殊に艶めかしう、至り深く見えたり。「猶現實とは思ひ給へられぬ御住居を承るも、明けぬ夜の心惑ひかとおん。然りとる年月は細給はじと、思ひ遣り聞えさするにも、罪深き身のみこそ、又聞えせん事も遙かなるべけれ。

浮海布刈る伊勢男の海人を思ひ遣れ浪波垂るてふ須磨の浦にて

萬づに思ふ給へ亂るる世の有様も、猶如何に成り果つべきにか」と多かり。

伊勢島や汐干の瀧に漁りても云ふかひ無きは我身なりけり

物を哀れと思しけるままに、打置き打置き書き給へる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻き續けて、墨次など見所あり。「哀れに思ひ聞えし人を、一節憂しと思ひ聞えさせし心過まりに、此の御息所も思ひ憐んじて別れ給ひにし」と思せば、今にいとほしう、忝きものと思ひ聞え給ふ。折からの御文、いと哀れなれば、御使さへ降まじうて、一三日居させ給ひて、彼處の物語など爲させて聞し召す。若やかに、氣色ある侍の人なりけり。斯く哀れなる御住居なれば、斯様の人も自ら物遠からで、微見奉る御様、容貌を、「いみじうめでたし」と涙落しけり。御返り書き給ふ言の葉思ひ遣るべし。「斯く世を離るべき身と、思ふ給へましかば、同じうは慕ひ聞えましものをなどなん。徒然と心細きままに、

伊勢人の波の上漕く小船にも浮海布は刈らで乗らましものを

海人が積む歌きの中に汐垂れていつとて「二字因まで」須磨の浦と眺めん

聞えさせん事の何時とも侍らぬこそ、盡きせぬ心地し侍れ」などぞ有りける。斯様に何處にも、覺束なからず聞え交し給ふ。花散里も「悲し」と思しけるままに、書き集め給へる御心見給ふに、をかしきも目慣れぬ心地して、何れも打見給ひつつ慰め給へど、物思ひの催し種なめり。

荒れ増さる軒のしのぶを眺めつつ繁くも露の掛かる袖かな

と有るを、「げに雅より外の後見も無き様にておはすらん」と思し遣りて、「長雨に樂土所所崩れて」など聞き給へば、京の家司の許に、仰せ遣はして、「近き國の御庄の者など催させて、仕うまつるべき由」速給はず。尙侍の君は、人笑へにいみじう思し屈ほるるを、大臣いと愛しう爲給ふ君にて、切に宮にも内にも奏し給ひければ、限り有る女御、御息所にもおはせず、公様の宮仕と思し成せり。また彼の憎かりし故こそ酸めしき事も出で來しか。怒られ給ひて、參り給ふべきに付けても、猶心に沁みし方ぞ哀れに覺え給ひける。七月に成りて參り給ふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人の謗りも知ろし召されず、例の上に侍はせ給ひて、萬づに恨み、且つは哀れに契らせ給ふ。御様容貌もいと艶めかしう清らなれど、思ひ出づる事のみ多かる心の中ぞ忝き。御音楽の序に、「其人の無きこそいと蕭蕭しけれ。如何に況して然思ふ人多からん。何事も光無き心地するかな」と宣はせて、「院の思し宣はせし御心を還へつるかな。罪得らんかし」とて涙ぐませ給ふに、え念じ給はず。「世の中こそ、有るに付けても、あぢきなきものなりければ思ひ知るままに、久しく世に有らんものとなん更に思はぬ。然も成りなんに、如何が思さるべき。近き程の別れに、思ひ貶されんこそ妬けれ。生ける世にとは、げに善からぬ人の云ひ置きけん」と、いとなつかしき御様にて、物を眞に哀れと思し入りて宣はするに付けて、ほろほろと溢れ出づれば、「然りや、何れに落つるにか」と宣はず。「今まで皇子たちの無きこそ蕭蕭しけれ。春宮を院の宣はせし様に思へど、善からぬ事ども出で來れば、心苦しう」など、世を御心の外に政ち成し給ふ人人の有るに、若き御心の強き所無き

程にて、「いとほし」と思したる事も多かり。須磨には、いとど心盡しの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の「關吹き越ゆる」と云ひけん浦波、夜夜は、げにいと近く聞えて、又無く哀れなるものは、斯かる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、打休みわたれるに、獨り目を覺まして、枕を敬てて四方の嵐を聞き給ふに、浪唯だ此處もとに立ち來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりに成りにけり。琴を少し掻き鳴らし給へるが、我ながらいと荒涼う聞ゆれば、御き舎し給ひて、

戀ひ忙びて泣く音に紛ふ浦波は思ふ方より風や吹くらんと歌ひ給へるに、人人驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいなら起き居つつ、鼻を忍びやかにかわたす。「げに如何に思ふらん、我身一つに由り、親兄弟片時立ち離れ難く、程に付けつつ思ふらん家を思はれて、斯く感ひ合へる」と思すに、いみじくて、「いと斯く思ひ沈む様を、心細しと思ふらん」と思せば、晝は何くれと戯れ事打述給ひ紛らはし、徒然なるままに、いろいろの紙を讀きつつ手習を爲給ふ。珍らしき様なる唐の綾などに、「さまさまの繪どもを書きすさび給へる屏風の表どもなど、いとめでたく見所あり。人人の語り聞えし海山の有様を、遙かに思し遣りしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯の立たずまひ、又無く書き集め給へり。「此頃の上手に爲める千枝、常則など召して、作繪仕うまつらせばや」と、心もとながり合へり。なつかしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しき事にて、四五人ばかりぞ、つと侍ひける。前栽の花いろいろ咲き亂れ、面白き夕暮に、海見やらるる廊に出で給ひて、侍

み給ふ御様の、ゆゆしう清らなる事、所からは況して此世の物とも見え給はず。白き綾の類かなる紫苑色かと奉りて、濃かなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる御様に、「釋迦牟尼佛弟子」と名告りて、緩針かに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より、船どもの謠ひ喧騒りて漕ぎ行くなども聞ゆ。仄かに唯だ小き鳥の浮べると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、梶の音に紛へるを、打眺め給ひて、涙の溢るるを、かき拂ひ給へる御手附、黒木「団のアリ」御數珠に映え給へるは、故郷の女戀しき人の心慰みけり。「人の心云云団人の心地、皆慰みにけりトアリ」

初雁は戀しき人の列なれや旅の空飛ぶ聲の悲しきと述給へば、良清、

書き運ね昔の事ぞ思ほゆる雁は其夜の友ならねども

民部の君、

心から常世を捨てて鳴く雁を雲の外にも思ひけるかな

前の右近の丞、

常世出でて旅の空なるかりがねも列に後れぬ程ぞ慰む

「友恋はして如何に侍らまし」と云ふ。親の常陸に成りて下りしにも誘はれで、參れるなりけり。下には思ひ碎くべかめれど、諒りかにもてなし、冷然き様に爲歩りく。月のいと華やかに射し出でたるに、「今宵は

十五夜なりけり」と思し出でて、殿上の御遊び戀しく、「所所眺め給ふらんかし」と、思ひ遣り給ふに付けても、月の顔のみ擬視られ給ふ。「二千里外古人心」と誦し給へる、例の涙も止められず。入道の宮の「霧や隔つる」と述給はせし程、云はん方無く戀しう、折折の事思ひ出で給ふに、よよと泣かれ給ふ。「夜更け侍りぬ」と聞ゆれど、猶入り給はず。

見る程を暫し慰む廻り逢はん月の都は遙かなれども

其夜、上のいとつかしう、昔物語など爲給ひし御様の、院に似奉り給へりしも、戀しう思ひ出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今ここに有り」と誦しつづ入り給ひぬ。御衣は眞に身放たず、傍らに置き給へり。

憂しとのみ偏に物は思ほえて左右にも濡るる袖かな

其頃大貳は上りける。殿めしう類廣く、女がちにて所狭かりければ、北の方は船にて上る。浦傳ひに遣透しつづ来るに、外より面白き邊りなれば心留まるに、大將斯くておはすと聞けば、あいなく好いたる若き女達は、船の中さへ耻かしう、心化粧せらる。況して五節の君は、綱手引き過ぐるも口惜しきに、琴の聲風に附きて遙かに聞ゆるに、所の様、人の御程、物の音の心細さ取り集め、心有る限り皆泣きにけり。帥御消息聞えたり。「いと遙かなる程より罷り上りては、先づ何時しか侍ひて、都の御物語もとこそ思ひ給へ侍りつれ。思の外に斯くておはしましたしける御宿を罷り過ぎ侍る、辱く悲しうも侍るかな。相知りて侍る人人、然るべき是れ彼れ參で來迎へて數多侍れば、所狭さを思ひ給へ憚り侍る事ども侍りて、え侍らはぬ事、殊

更に参り侍らん」など聞えたり。子の筑前の守ぞ参れる。此殿の藏人に成し願ひ給ひし人なれば、「いと悲し、いみじ」と思へども、また見る人人の有れば、聞えを思ひて、暫しも立ち留まらず。「都離れて後、昔親しかりし人人、相見る事難くのみ成りにたるに、斯くわざと立ち寄り物したる事」と連絡ふ。御返りも然様になん。守泣く泣く歸りて、おはする御有様語るに、帥より初め、迎への人人、凶凶しう泣き満ちたり。五節は、とかくして聞えたり。

琴の音に引き留めらるる綱手纏たゆたふ心君知るらめや

「好き好きしさも、人な咎めそ」と聞えたり。微笑みて見給ふ。いと恥かしげなり。

心有りて引き「困く」手の綱のたゆたはば打過ぎましや須磨の浦波

「漁せんとは思はざりしはや」と有り。驛の長に句詩取らす人も有りけるを、況して落ち留まりぬべくなん覺えける。都には月日過ぐるままに、帝を初め奉りて、戀ひ聞ゆる折節多かり。春宮は況して常に思し出でつつ忍びて泣き給ふを、見奉る御乳母、況して命婦の君はいみじう哀れに見奉る。入道の宮は春宮の御事をゆゆしうのみ思ししに、大將も斯く流離へ給ひぬるを、いみじう思し歎かる。御兄弟の親王たち、睦まじう聞え給ひし上達部など、初めつ方は訪らひ聞え給ひなど有りき。哀れなる詩を作り交はし、其れに付けても世の中へのみ愛でられ給へば、後の宮聞し召して、いみじく連絡ひけり。朝廷の勅事なる人は、心に任せて、此世の味ひをだに知る事難うこそ有んなれ。面白き家居して、世を誇り非難きて、彼の甕を馬

と云ひけん人の僻めるやうに、追従するなど、悪しき事も聞えければ、「煩はし」とて、絶えて消息聞え給ふ人無し。二條院の姫君は、程經るままに思し慰む折無し。東の對に侍ひし人ども皆渡り参りし初めは、「何どか然しも有らん」と思ひしかど、見奉り馴るる程に、なつかしうをかき御有様、眞實やかなる御心ばへも思ひ遣り深う哀れなれば、退かで散るも無し。尋常ならぬ際の人人には、微見えなど爲給ふ。許多の中に勝れたる御志も、「道理なりけり」と見奉る。彼の御住居には、久しう成るままに、は「困え」念じ過ぐすまじう覺え給へど、我身だにあさましき宿世と覺ゆる住居に、如何でか打具しては調和無からん様を思ひ返し給ふ。所に付けて萬づの事、様異り、見給へ知らぬ下人の上をも、見給ひ習はぬ御心地に、日覺ましう忝う、自ら思さる。煙のいと近う時時立ち來るを、「是れや海人の鹽焼くならん」と思し渡るは、おはします後ろの山に、柴と云ふ物燃ふるなりけり。珍らかにて、

山麓の庵に焚けるしばしばも言問ひ來なん懸ふる里人

冬に成りて雪降り荒れたる頃、空の氣色も殊に濃く眺め給ひて、琴を弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。心留めて哀れなる手など弾き給へるに、他物の聲ども早めて、涙を拭ひ合へり。昔胡の國に遣はしけん女を思し遣りて、況して如何なりけん。此世に我が思ひ聞ゆる人などを、然様に放ち遣りたらん事など思ふも、有らん事の様にゆゆしうて、「霜の後の夢」と誦んじ給ふ。月いと明う射し入りて、はかなき旅の御所は、奥まで限無し。床の上に夜深き空も見ゆ。入方の月の影濃く見ゆるに、

「唯だ是れ西に行くなり」と獨言ち給ひて、
何方の雲路に我れも迷ひなん月の見るらん事も耻かし
と獨言ち給ひて、例の睡眠まれぬ曉の空に、千鳥いと哀れに鳴く。

友千鳥諸聲に鳴くあかつきは獨り寤覺の床も頼もし

まだ起きたる人も無ければ、返す返す獨言ちて臥し給へり。夜深く御手水参りて、御念誦など爲給ふも、珍らしき事のやうに、めでたくのみ覺え給へば、え見奉り捨てず、家に假初にもえ出でざりけり。明石の浦は唯だ這ひ渡る程なれば、良清の朝臣、彼の入道の女を思ひ出でて、文など遣りけれど返事もせず。父の入道ぞ「聞ゆべき事なん。假初に對面もがな」と云ひけれど、「受け引かざらんもの故、行き掛かりて、空しく歸らん後手も汗蕩なるべし」と、屈んじ甚うて行かず。世に知らず心高う思へるに、國の中は、守のゆかりのみこそは畏き事に爲めれど、僻める心は更に然も思はで、年月を経けるに、此君斯くておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそ、朝廷の御畏まりにて、須磨の浦に物し給ふなれ。吾子の御宿世にて、覺えぬ事の有るなり。如何で斯かる序に、此君に奉らん」と云ふ。母「あな不備や、京の人の語るを聞けば、やんごとなき御女ども、いと多く持給ひて、其餘り、忍び忍び帝の御女をさへ過まち給ひて、斯くも騒がれ給ふなる人は、正に斯く怪しき山賊を、心留め給ひてんや」と云ふ。腹立ちて、「え知り給はじ、思ふ心殊なり。然る心を爲給へ、序して此處にもおはしません」と、心を遣りて云

ふも、頭なく見ゆ。目眩きまで裝飾ひ愛護きけり。母君「何どがめでたくとも、物の初めに、罪に當りて流されおはしたらん人をしも思ひ掛けん。然ても心を留め給ふべくはこそ有らめ。戯れにても有るまじき事なり」と云ふを、いと甚く咄く。「罪に當る事は、唐土にも我が朝廷にも、斯く世に勝れ、何事にも人に殊に成りぬる人の、必ず有る事なり。如何に物し給ふ君ぞ。此の母御息所は、己が叔父に物し給ひし按察大納言の御女なり。いと警策なる名を取りて、宮仕に出だし給へりしに、國王勝れて時めかし給ふ事變ひ無かりける程に、人の嫉み多くて亡せ給ひにしかど、此君留まり給へる、いとめでたし。斯く女は、心を高く遣ふべきものなり。己れ斯かる田舎人なりとて、思し捨てじ」など云ひ居たり。此女勝れたる容貌ならねど、なつかしう貴はかに、心ばせある様などぞ、げにやんごとなき人に劣るまじかりける。身の有様を口惜しきものに思ひ知りて、「高き人は我を何の数にも思さじ。程に付けたる世をば更に見じ。命長くて思ふ人に後れなば、海人にも成りなん、海の底にも入りなん」などを思ひける。父君、所狭く思ひ愛護きて、年に二度住吉に詣りてさせけり。神の御験をぞ人知れず頼み思ひける。須磨には年復りて、日長く徒然なるに、植ゑし若木の櫻儼かに咲き初めて、空の氣色晴朗なるに、萬づの事思し出でられて、打泣き給ふ折多かり。二月廿日餘り、往にし年京を別れし時、心苦しかりし人人の御有様など、いと戀しく、南殿の櫻は盛りに成りぬらん、一年の花の宴、院の御氣色、内の上のいと清らに艶め「原本き誤レリ、因ニ由リテ訂ス」いて、我が作れる句を誦し給ひしも、思ひ出で聞え給ふ。

何時と無く大宮人の戀しきに櫻挿しし今日も來にけり
いと徒然なるに、大殿の三位中將は、今は宰相に成りて、人からのいと善ければ、時世の覺え重くて物し給へど、世の中の哀れにあぢきなく、物の折毎に戀しく覺え給へば、「事の聞え有りて罪に當るとも、如何がはせん」と思し成して、俄かに參りて給ふ。打見るより、珍らしく嬉しきにも、一つ涙を溢れける。住ひ給へる様、云はん方無く唐めいたり。所の様繪に書きたらんやうなるに、竹編める垣爲わたりして、石の階、松の柱、粗雑なるものから、珍らかにをかし。山曉めきて、許し色の黄がちなるに、靑鈍の狩衣、指貫、打變れて、殊更に田舎びてもなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり。取り遣ひ給へる調度も、假初にして、御座所も顯露に見入れらる。棋、雙六の籠、調度、彈棋の具など、田舎わざになして、念珠の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。物參れるなど、殊更所に付け、興ありて爲なしたり。海人ども漁りして、貝つ物持て參れるを、召し出でて御覽す。浦に年經る様など問はせ給ふに、標標安け無き身の愁へを申す。そこはかと無く囁づるも、「心の行方は同じ事なるかな」と哀れに見給ふ。御衣ども被けさせ給ふを、「生ける甲斐あり」と思へり。御馬ども近く立てて、見遣りなる、倉か何ぞなる、稱ども取り出でて飼ふなど、珍らしう見給ふ。「飛鳥井」少し話ひて、月頃の御物語、泣きみ笑ひみ、「若君の、何とも世を思さで物し給ふ悲しさを、大臣の明暮に付けて思し歎く」など語り給ふに、堪へ難く思したり。盡きすべくも有らねば、なかなか片端もえ換ねばす。終夜睡眠せず、詩作り明し給ふ。然云ひながらも、物の聞えを懐みて、

急ぎ歸り給ふ。いとなかなかなり。御土器參りて、「酔ひの悲みの涙澁く春の盃の中」と、諸壁に誦んじ給ふ。御供の人ども皆涙を流す。各自はつかなる別れ惜むべかめり。朝ぼらけの空に、雁連れて渡る。主人の君、

故里を何れの春か行きて見ん羨ましきは歸るかりがね
宰相更に立ち出でん心地せで、

飽かなくに雁の常世を立ち別れ花の都に道や惑はん
然るべき都の菴など、由ある様にて有り。主人の君、斯く添き御送りにとて、黒駒奉り給ふ。「ゆゆしう思されぬべけれど、風に當りては嘶えぬべければ」など申し給ふ。世に有り難げなる御馬の様なり。互に「忍び給へ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり、人咎めつべき事は互にえ爲給はず。日やうやう射し上がりて、心憊ただしければ、顧みのみ爲つ出で給ふを、見送り給ふ氣色、いとなかなかなり。「何時また對面給はらんとすらん。然りともし斯くてやは」と申し給ふに、主人、

雲近く飛び交ふ鶴も空に見よ我は春日の曇り無き身ぞ
「且つは頼まれながら、斯く成りぬる人は、昔の賢き人だに、はかばかしう世にまた交らふこと難く侍りければ、何か都の境を、又見んとなん思ひ侍らぬ」など述給ふ。宰相、
便宜無き雲居に獨り音をぞ鳴く鶯比べし友を戀ひつつ

「忝く馴れ聞え侍りて、いとしもと悔しう思ひ給へらるる折多く」など、薫やかにも有らで歸り給ひぬる名残、いとど悲しう眺め暮し給ふ。三月の朔日に出で來たる巳の日、「今日なん斯く思す事ある人は、御覽し給ふべき」と、生賢しき人の聞ゆれば、海面もゆかしうて出で給ふ。いと粗雑に敷障ばかりを引き廻らし、此國に通ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。船に事しき人形載せて洗すを見給ふにも、比へられ

て、知らざりし大海の原に流れ來て一方にやは物は悲しき

とて居給へる様、然る晴に出でて、云ふ由無く見え給ふ。海的面は晴朗と和ぎ渡りて、行方も知らぬに、來し方、行く先思し續けられて、

八百萬づ神も哀れと思ふらん犯せる罪の其れと無ければ

と述給ふに、俄かに風吹き出でて、空もかき昏れぬ。御殿も爲果てず、立ち騒ぎたり。膝笠雨とか降り來て、慌ただしければ、皆歸り給はんとするに、笠も取り敢へず。然る心も無きに、萬づ吹き散らし、又無き風なり。波いと激めしう立ち來て、人人の足を空なり。海的面は食を張りたらんやうに、光満ちて、雷鳴り閃めく。落ち掛かる心地して、辛うじて迎り來て、「斯かる目は見すも有るかな、風などは吹く氣色づきてこそ有れ、あさましう珍らかなり」と感ふに、猶止まず鳴り滿ちて、雨の足當る所、通りぬべく疎鳴めき落つ。「斯くて世は盡きぬるにや」と、心細く思ひ感ふに、君は寛舒やかに經打誦んじておはす。暮れぬれば

雷少し鳴り止みて、風そ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。「今暫し斯くだに有らば、浪に引かれて入りぬべかりけり。高潮と云ふ物になん、取り敢へず人損はるとは聞けど、いと斯かる事は、まだ知らず」と云ひ合へり。曉方、皆打休みたり。君も聊か寝入り給へれば、其様とも見えぬ人來て、「何と宮より召し有るには参り給はぬ」とて、逆り歩りくと見るに、驚きて、「然は、海の中の龍王の、甚う物愛でするものにて、魅入れたるなりけり」と思すに、いと物煩かしう、此の住居堪へ難く思し成りぬ。

源氏物語第一畢

訂校夫敦宗正
源氏物語
第一

昭和十四年六月二十日印刷
昭和十四年六月廿五日發行

定價金一圓二十錢
外地定價一圓卅二錢

著者 正宗敦夫

發行者 坂上秋良

印刷者 川端徳三

東京市牛込區揚場町八番地

建設社出版部

振替東京八四五四三番

發行所

正宗校訂
敦夫

源氏物語 全五卷

各卷定價壹圓貳拾錢
全卷金六圓

第一卷 內容

桐壺 帚木 空蟬 夕顏 若紫 末摘花 紅葉賀
花宴 葵 神 花散里 須磨

第二卷 內容

明石 滯標 蓬生 關屋 繪合 松風 薄雲
權 乙女 玉鬘 初音 胡蝶 螢 常夏

第三卷 內容

野分 行幸 藤袴 眞木柱 梅枝 藤裏葉 若菜上
若菜下 柏木 橫笛 鈴蟲

第四卷 內容

夕霧 御法 幻 雲隱 匂宮 紅梅 竹河
橋姬 椎本 總角 早蕨

第五卷 內容

宿木 東屋 浮船 蜻蛉 手習 夢浮橋

發行所

東京市牛込區揚場町八番地

建設社

振替東京八四五四三番

390
119

4

終

